

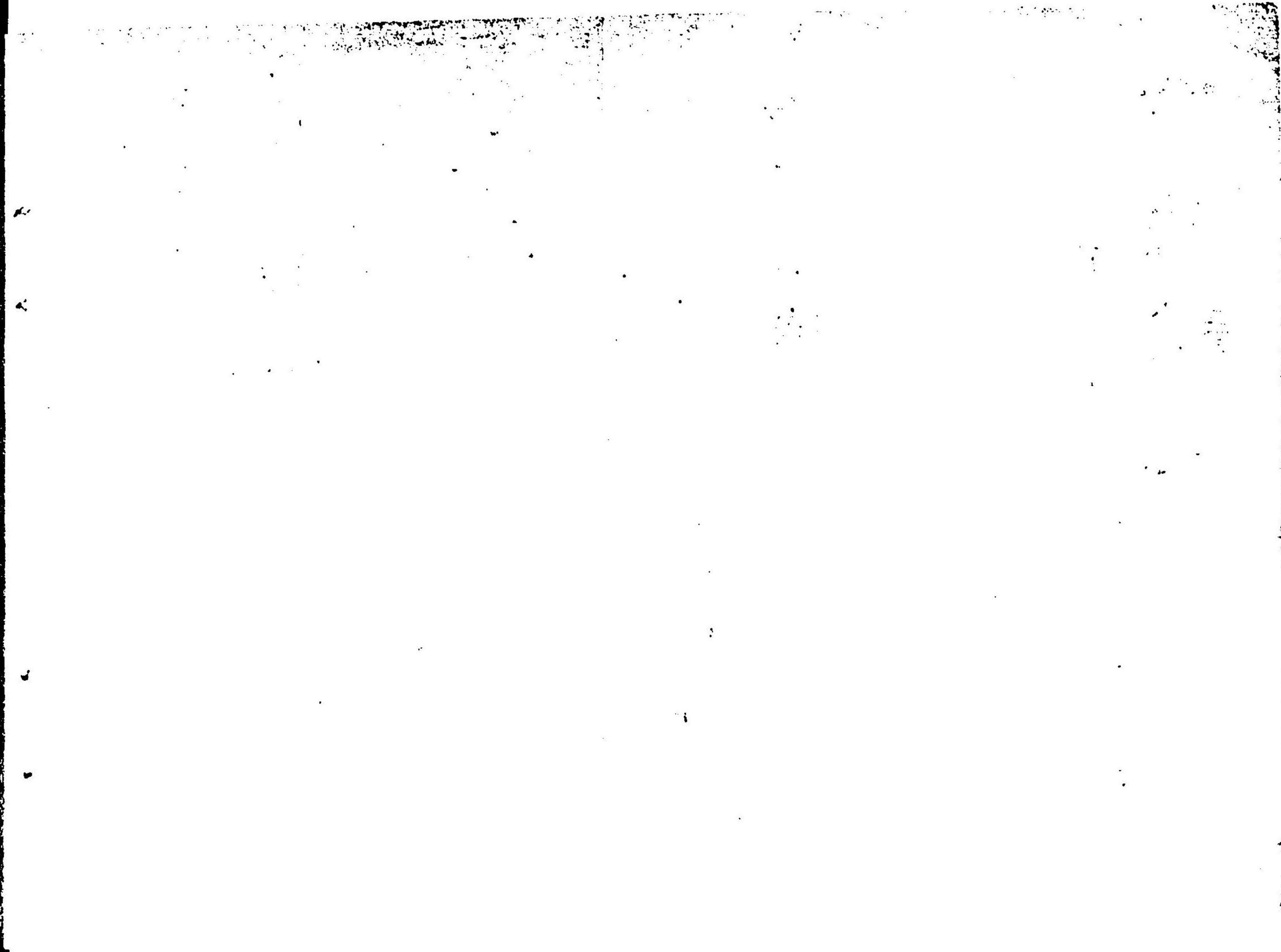
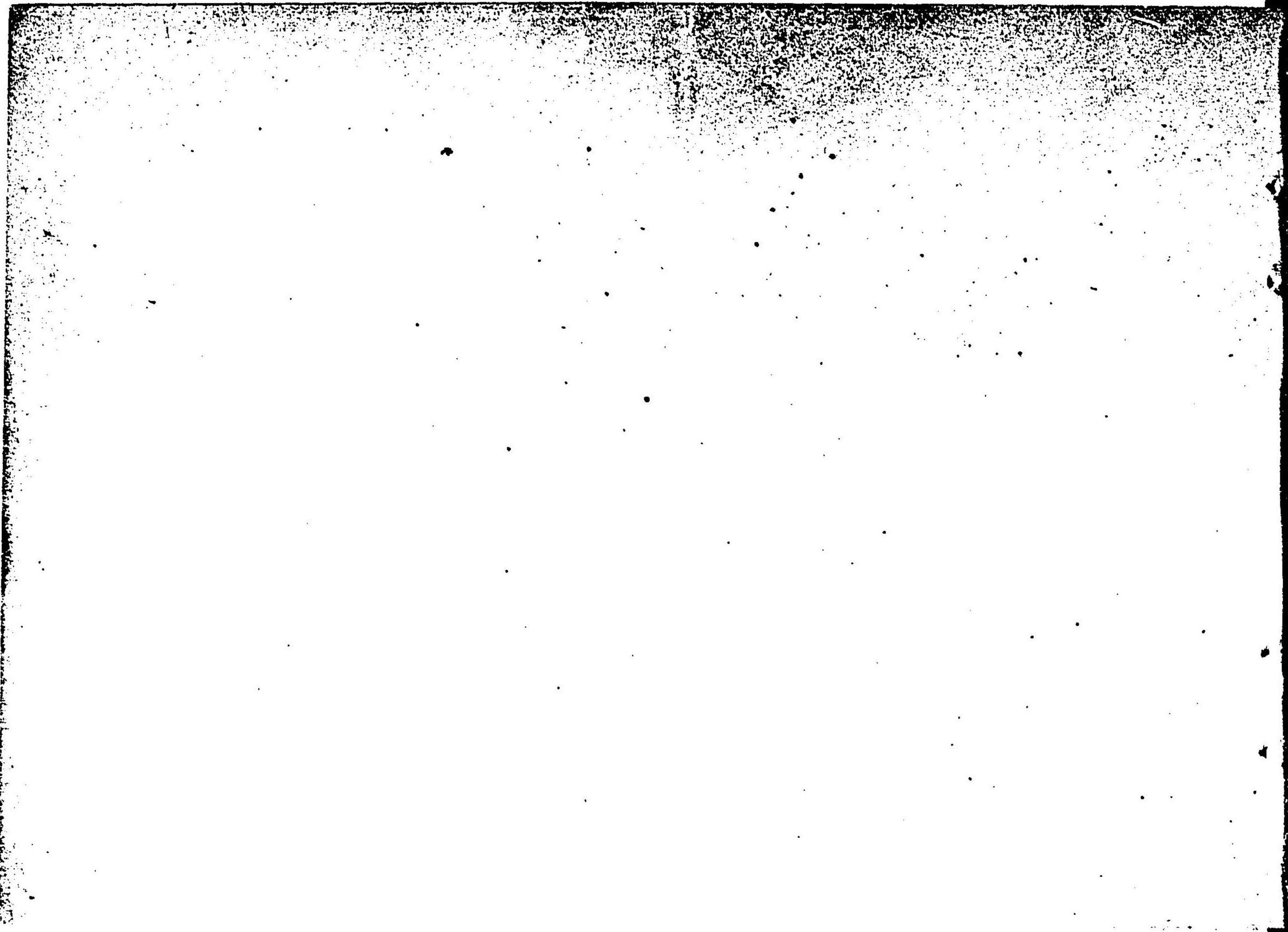
錦獅肥後彦磨撰

薩摩琵琶歌集

(用習練)

257
539

東京樂泉社



はしがき

逢坂山の露を履て秘曲を得んと通ひける博雅の
の熱心は遂に名を成すに至れり、夫は昔の琵琶の物
語にして今の世には青年諸士の熱心に奏する薩摩

明治 1
内交

琵琶あり、悲壯快活の曲も優美高雅の調も名家のもの
せし筆の上より世に聞えて、流泉啄木の夫れとは變
れども鬼神を感動せしむ可き曲多く、今日の流行を
見るは偶然にあらざるなり、余も亦同好の士と等し
く斯道に興味を有するも未だ其域に達せず、人に教
ゆると云ふは烏滸なるわざながら先輩の笑ひをも顧
みず、余が學びたる琵琶に一流の音譜を施しつゝ、月
のゆふへ花のあしたの苦心積りて一の巻となれり、
練習書と言はんも恥かしき沙汰ながら初めて琵琶歌
を學ぶ人の爲に手引草ともならば、聊か斯の道の廣
まり行く棗となるべく、以て共に樂むの友を得んと
おもふのみ

明治戊申七月

撰者記

彈奏の事

特48
928

一 彈奏に就ての心得は既に先輩の世にものせしあり
今更贅言を要せず故に我が練習會則の一部を録す
○ 練習者は歌曲の先を急ぐべからず少しづつ、能く覚えて徐々と進むべし一曲にても整調せば次曲の練習は易からむ

○ 練習者は始めに歌曲の文意及其段落を了解するを必要とす若し解し難き所あらば必ず識者に質問あるべし文意段落を解せされば凡て彈奏も無味なればなり

一 歌曲の獨習は難事なり併し自好の單一識者の彈奏を屢々傾聽して研究せば其得る所多からむ
一 左に音調の高低の此較を示す

○ 金剛石

最高音

(六)時計の針の絶間なく……………●

○

中高音

(五)誠の徳はあらはるれ……………●
(四)日影おしみてはげみなば……………○
(三)いかなるわざかならざらむ……………▲
(二)よきにあしきにうつるなり……………▲
(一)學びの道にすゝめかし……………▲

高音

○ (一)玉の光りはそはざらむ……………△△

平音

○ (四)學びて後にこそ……………上上上上
(三)人は器に従ひて……………上上上上
(二)人は交る友により……………上上上上
(一)駒に鞭打て……………上上上上

低音

○ (一)金剛石も磨かずば……………上上
(二)已によさるよき友ぞ……………上上

中低音

○ (三)人も……………下下
(二)其さまくになりぬなり……………下下
(一)心の……………下下

最低音

○ ……
崩れ及吟替りの、、は中
高音、又、。は高音の部

目次

一金剛石	……………	一
一國船	……………	一
一母の教	……………	一
一七卿落	……………	二
一春の調	……………	二
一春日野	……………	三
一蓬萊山	……………	四
一武藏野	……………	五
一送別	……………	六
一真心	……………	六
一櫻狩	……………	七
一國の御柱	……………	九
一小楠公	上中下……………	一
一城山	……………	一四
一俊寛	上下……………	一五
一河中島	……………	一九
一芙蓉峯	……………	二二
一辨の内侍	……………	二三

一 夢	二五
一 潯陽江	二七
一 石童丸	三〇
一 小督	三四
一 錦の御旗	三六
一 吉野落上下	三九
一 本能寺	四四
一 毒饅頭	四八
一 奇縁	五〇
一 月照	五四
一 威海衛	五五
一 臺灣入	五八
一 吹雪の敵	六〇
一 召集令	六三
一 母の誠	六四
一 旅順口	六五
一 常陸丸	六八
一 別れの國歌	七〇
一 橋大隊長	七一

以上四十一曲

皇后陛下御製

金剛石

金剛石も磨かずば、「玉の光りはそはざらむ」人も學びて後にこそ、誠の徳はあらはるれ「時計の針の絶間なく」めぐるが如く時の間も、日影おしみて勵みなば、如何なる業か成らざらむ「水はうつはに従ひて、其さまくになりぬなり、人は交る友により、よきにあしきにうつるなり」己に増る善き友を、撰び求めて諸共に、「心の駒に鞭打て、學びの道にすゝめかし」

薩摩琵琶歌集

國 船

雲に聳ゆる高山も、登らばなとか越えざらむ「空を
浸せる海原も、渡らば終に渡るべし」我が秋津洲は
茜さす「東の海の離れ嶋、たとへば海の只中に、浮
べる船に髣髴り」二萬方里の船のうち、四千餘萬の
乗組あり、船の主の指揮を受け、文明海に進め行く「
水主楫取多かるに、われらも楫子の一人なり」船の
行手は和田の原、八重の汐路の遠ければ、はやて
逆巻折もあり、高浪荒る、時もあり「船手の業に習
はずば、はやて高浪凌ぎ得て」思ふ港にいかで着く
べし

母の教

やよ正行よ正行よ、まさなきことなしたまひそ「父
が御身を歸せしは、若木の繼穗に橘の、實のなりい
でん爲ならず」吉野の山の春の月「光りは見えぬ世
なりとも、錦の御旗ひるがへし」楠氏のはらからの、
あらん限りは君の爲め、斃れて止めとの御遺言、あ

だになさじと立歸り「おんみ妻に告げながら、其舌の根もかわかぬに」早くも其事忘れしか、忍びがたきを忍びつ、忠と孝とを全うし「君の御心安んぜよ、親の御靈もなぐさめよ、まさなきことなしたまはせ」

七 卿 落

世は蒹葭と亂れつ、茜さす日もいと暗く「蟬の小川に霧立ちて、隔ての雲となりけり」あら痛ましや玉冠「内裏に明暮宿直せし、實美朝臣に季知卿、壬生、澤、四條、東久世、其外錦の小路殿」身は浮草の定めなき、旅にしあれば駒さへも、進みかねては嘶へつ、「降りしく雨の絶間なく、涙に袖の濡果て、是より海山淺茅原」露霜分けて蘆が散る、難波の浦にやく鹽の、からき浮世はものかはと「行かむとすれば東山、みねの秋風身にしみて、朝な夕なに聞馴れし、妙法院の鐘の音も、冴て今宵は哀れなり」いつしか暗き雲霧を、拂ひ盡して百敷の、都の月をし愛給ふらん

春 の 調

新玉の年の始めの壽や、昔かはらず吹きあぐる「笛とつゝみの音迄も、春のしらべに聞えつ」玉だれゆらぐ風立ちて「舞の袂も長閑なり、神の井垣の老松も、枝を連ね葉を重ね」宜も大夫の影高く、齡を君にゆづる葉の、常盤の色ぞたぐひなき「軒端に咲ける梅が枝も、和泉式部のゆかりとや、床しくかほる窓のうち、文見る袖に移りくる、好文木の名に恥ぢず」又高砂住の江の、松に相生の尉と姥「いもせの契り末長く、千代のためしにひかれつ、四方の海原浪なきて、吹も静けき時津風、枝もならさぬ御代の春」千秋樂には民をなで、萬歳樂には命を延ぶる樂しみも「年毎の、今日汲みかはす盃に、君と御國を祝ふなる、松籟こそ目出度けれ」

春 日 野

春日野に、下もえ出づる若草の、年の戸明けて秋津國「霞渡れる片岡に、月は残りて雉子なく」明けの友づる君か代を、壽き祝ふ初聲に、南山の、榮え久しき松竹の、落葉かきとるもろ人の、遊ぶ小川の菊の露「流れもにはふ五百とせの、よはひを國にゆつ

る葉の、朝日輝く富士の峯、是を蓬萊山とはうたひける。七寶の峯は、影を湖水に浸し、木々の梢も荒磯の、月海上に浮びては、兎も走る波のうへ。緑樹影沈みては、魚木に昇る風情かな、五風十雨の御代の春、四海もなびく時津風。君が治むる御代なれば、幾萬代迄と、祈らぬものこそなかりけれ。

蓬萊山

目出度やな、君が恵は久方の、光り長閑き春の日に。不老門を立ち出でて、四方の景色を詠むれば。峯の小松に雛鶴棲みて、谷の小川に龜遊ぶ、君か代は、千代に八千代にさざれ石の、巖となりて、苔の生すまで、命ながらへて、雨塊を破らず、風枝を鳴らさじといへばまた、堯舜の御代も斯くあらむ。かほどに治まる御代なれば、千草萬木花咲實り、五穀は國にみちくして、上には金殿樓閣豊をならへ。下には民の寵賑ひて、仁義たゞしき御代の春、蓬萊山とは是とかや。君が代の千歳の松も常磐色、かはらぬ御代の例しには、天長地久と、國も豊かに治まりて、弓は袋に、劍は箱に藏め置く。諫鼓苔深うして、鳥

もなかく、驚くやうぞなかりける。

武藏野

武藏野に、草は若なく多かれど、摘み菜にすれば、儲も少なし。皆人は若き時より、只徒に日を送り。才智藝能無き人は、寶の山に入りながら、空しく歸るが如くなり。偶人間界に生れ來て、眞如の玉を磨かずば、人と生れし甲斐もなし。人よりは淺く思はれて、犬の老たる如くにて、朽果るこそ無念なれ、又いつの世の、いつの時に、磨くらむ。頼まれぬ世にもあるかな月鼠、戦ぐ草葉の露の身なれば、假令高位長者の身となりて、七珍萬寶みちくして、榮花にほこる樂しきも、一夜の夢の如くなり。歡樂極りて、哀情多しと、古人の文にもしるさる。さればにや、生々世々のたのしみも、心のうちの月や花、これを樂しむ人もなし。會者定離、生者必滅の世の習ひ、春去り秋は蟬の聲、さてもはかなき命かな。世の中を、思へば夢か稻妻の、ちらとするまのかたらひも、慳貪愚痴は迷ひなり。引よせて結へば草の庵にて、とくればもとの野原なり。少しきを足れり

とも知れ、みちぬれば、月も程なく缺けて行く、十
六夜の空や人の身の上

送別

あかねさす、わが日の本に人といふ、人のうちより
えらまれて「海原遠く浦々の、浪の花咲く異國に、
渡り行なる君が名と、譽れは世々に残るらむ」茲に
船出を祝はむと「心をこめて足曳の、山にも狩り得
海に釣り、川に漁り野に求め、なほあきたらで鳳を
ささ、鱗を屠りて盃を、勸る中にかたへより、吟ず
る聲の高らかに、

渭城長雨濕輕塵 客舍青青柳色新

勸君更盡一杯酒 西出陽關無故人

古き調べの唐歌に、思ひをよせて別れをば、惜む心
もなつかしく、皆とり／＼に又酒を、勸めて興をぞ
添へにける「暫らくありて一同に、盃さげ起立し
て」君萬歳と唱へけり、君萬歳と唱へけり。

真心

誠の外に道はなし、誠は神の心なり「此御心にな
ふこそ、人たる人といふべけれ」忠と孝とは昔より

我日の本の基なり、外國人が學びても、行ひがたき道
ぞがし「高麗唐土の軍にも、國の光りを輝かし、高
砂島の高山も、わが富士の嶺の下に立つ、御代に逢
へるも誠てふ、母の生にし忠孝の、子等の功としら
れけり、宇佐の御神の託宣を「委曲に奏せし和氣の
君、湊川原のあだ浪に、玉とくだけし楠の」朝臣の
君の大君に、盡し給へる真心は、今が世までも人皆
の、鏡とこそはなりにけれ「衣の襟をかき合せ、か
くす鎧のいと輕き、親の心を打歎き、涙落して止め
つる、重盛卿の諫言も」世にかぐはしき櫻井の、底
の心を汲みとりて、教のまゝに立歸り、母につかへ
て時待ちし、正行朝臣の孝心も、共に干とせを貫き
て、父母に盡さむ人の子の、道の深を残しけり」
立向ふ人の心は鏡なり

おのが姿をうつしてや見む

と神の詠ぜし御心に、露もそむかず我身をば、朝な
夕なにみがけ人々

櫻狩

霞棚引山々の、盛りの花をながめむと「いな、く駒

に鞍置かせ、東雲近くあさちふの、芝の庵を只ひと
り、時ときはなれし鶯うぐいすの「聲こゑを聞ききつ、春の野のに、もゆる
草葉くさばのつゆわけて、すゝむる駒うまのたてがみに「み
だれか、れる青柳あざなの、糸いとを傳つたうて朝風あさかぜの、吹ふくとも
なしにゆかし香かほを、送おくりて我われをさそふかと、思おもふば
かりに遠近とんじんの、梢しやうは雪ゆきか白雲はくうんか「景色けいせき妙たぎなる其そのさま
に、うき世よの善惡ぜんあくも打忘うしわすれ、暫しばし木きかげに立寄たて、
矢立やたての筆ふでをとりあへず、

薄命能伸旬日壽 納言姓字冒斯花

零丁借宿平忠度 吟詠恨風源義家

志賀浦荒飜暖雪 奈良都古簇香霞

南朝天子今何處在 欲望芳山路更除

と書きつゞけたる水莖みづかきを、跡あとに残のこして花はなの香かほを、風
のまに／＼とめ來きれば、こゝは盛さかりを早過はやかて、散ちり
敷しく花はなは野のに畑はたけに、飛とひかふ蝶ちょうの如ごとくなり「嗚呼あゝ世
の中なかは鳥羽玉とりはなの「夢ゆめか現まか昨日きのうまで、榮さかえしもの、
今日けふは早はやや、見みる影かげもなく成なりはて、うき世よの中
とかこもつ、今更いまさらそれとゆふ暮くれの、鐘かねの音ねさへ身み
にしみて、昔むかしをしのぶ人もあらむ「さはさりながら

花の木も、又來またきむ春はるにめぐりあひ、まづしき人もい
つまでか、時ときめく時ときのなからめや「榮枯盛衰さかたけさかたけは世よの
習なひ、只玉ただたま銖しゆの道理道理を、たどらむ外ほかはなかりけり「
いざ歸かへらむと乗駒のりこまの、手綱てづなかひぐる其袖そのそでに「花はなの吹
雪ふゆきは掛かりけり、花はなの吹雪ふゆきはかゝりけり「

國の御柱

湊川みなとがわ、流れの水みづのいと清きよく、名なもたちばなの花はなの香かほ
は「八千代やちせんはおろか萬代まんだいの、末すえの末すえまでかをらむ「
赤阪山あかさんの秋あきの暮くれ「其真心そのまごころの紅べには、紅葉もみぢの色いろにかゞや
きて、三たび寄よせくる人波ひとなみを、大刀たちや風かぜ強く打拂うちなひ「
彼方あつちの空そらは雲くもはれて、月つきすみよしや天王寺てんわうじ、鐘かねの響なは
それとなく、諸行無常しよぎやうむじやうと告渡つたる「川がはは寄手よての三途川さんずがは、
おのれとをほれ沈しづみ行く、千劍破せんけんぱの城しろにさきがけて、
かつ色見いろみせよ山櫻やまざくら、嵐あらしや花はなのかたきなるらんと、二
人のしれもの詠よみたるは、わが身みの上うへとしらま弓ゆみ、
ひかれて蕨わづらの人形ひとがたに、たぶらかされて二つ無なき、命いのち
を落おすやからこそ、あはれといふもおろかなれ「金
剛山きやうざんの巍たか嶽がきとして「雲くもの上うへまで聳たかえしは、動うごかぬ君
が心こころにて、寄手よてを押おへ其罪そのつみを、たゞすの前まへゆ押出おしだし「

出雲路かけて火を放ち、僧都(吟替り)を語らひ泣しめて「あらぬ屍を尋ねさせ、四條河原(よしか)による波の、より／＼人を欺くも」心は清き櫻井の、驛(かき)に於ていとほしき、蕾の花に別れしも、皆大君の爲ぞがし「筑紫の山のほとゝぎす、友呼び集め九重の、雲井の空をこゝろざし、飛むとするを射留んと、弓に矢番ひ見渡せば」須磨の上野と鹿松の、岡にとよめき叫びあふ、聲は猿か小男鹿か、のがさじものと遠近に、群り集ふ獸等を、火串にあらぬ鎗先に、さして行へをつくぐと、思ひまはせば此後は、山ほとゝぎす山を出で、誰憚らず啼渡る、世とやならんと末かけて、さとり武夫は今茲に、死して七度生れ来て、鳥や獸を狩り盡し、大御心を休めむと、親族集へて湊川、あはれはかなき泡沫の、水の泡とぞ消えにける、

豹死留皮豈偶然、湊川遺蹟水連天、

人生有限名無盡、楠子誠忠萬古傳、

嗚呼是れ橘の花の香の、世々にたえざるるしにて、なき跡までも諸人の、袖にかをりは残りけり「嗚呼是れ橘の花の香の、世々に絶えざるるしにて、な

きあと迄も諸人の、袖にかをりは残りけり、袖にかをりは残りけり」

小楠公 上 櫻井驛

世は浮雲のゆきかひて、又もや曇る五月暗「山時鳥血に啼て、たてし策さへ容れられず、武運につきし身はとまれ、嗚呼我が君をいかにせん」われ若し死すと聞きまさは「黒木の御所の板びさし、北山風の射る矢をば防ぎかねつ、世をわびて、御衣の袖も五月雨の、あはれいかにや歎かれむ」聞よ正行流石にも、獅子は我子を産みて後、やがて高嶺の巖より、雲千仞の溪そこに、突き落してぞ氣を試す、なさけのなきが情ぞや「况んや汝今すでに、年は十歳に餘りあり、父が今のは一言の、耳にとまらば若竹や、まだうら若き身ながらも、教のふしに違なよ」扱、此度の一戦に「天下の安危定まれり、汝が顔を見んとも、是を限りと思ふなり」正成死せば忽ちに、代は尊氏に歸すならん、露の命のいと惜しみ、爲に多年の忠も義も、打忘れつ、逆賊の、軍下に降るるあらば、我父ならず汝らは、わが子にあらす臣ならず、若し一

族の一人だに、生き残りてぞあらんには、金剛山の
城枕、引籠りつゝ戦へよ、是れ第一の忠なるぞ、是
れ第一の孝なるぞ、香は千秋の末かけて、にほふため
しと菊水の、形見の刀西東、あと見かへりて別れ行、
其中空の五月雨に、啼聲高し郭公

同 中 河内の宿

散るを習ひの櫻井の、教への露に袖ぬれて、還らぬ
父の歸りをば「待や河内の宿の戸を、叩く水鶏の音
にさへ、出て幾度眺めけん」降りそふ雨の夜を更て、
なに松風の騒ぐらん(吟聲り)心の波ををづめつゝ、「敵が情
の贈り物、開けばあはれ思ひきや、父が血汐の首級
とは「色は青さめ目はとちて、齒をくひしはる御姿
に、母は涙の玉霰、無念は同じ正行は、父が形見の
刀もて、既に自害と見えにけり」母は小腕にとりつ
きて、聞かずや汝梅檀は、二葉ながらに芳はしき、
汝幼き身なれども、父が子なるぞ母が子ぞ、何ど
や斯ばかり血迷ひし」父が汝をとめしは、跡をと
はんが爲ならず、腹を切らんが故ならず、君何處に
も御座あらば、わが旗風に世をなびけ、君が御代に

もせよとなり「みづから母に聞かせしを、早も汝は
忘れけん、斯くては家の名をけがし、君が御用に立
たんこと」思ひよるべもなきなる、この捨小舟い
かにせん」正行今は禮盤の、上よりよと泣きおり
て、身ぞ浮草の涙川、情は深き垂乳根の、教の露に
生ひたちし、楠の若木ぞ芳はしき

同 下 吉野の奥

雲井櫻の雲としも、眺めし花は冬枯れて「名のみ吉
野の假宮に、大軍攻むると聞こゆれば、木魂にひびく
猿猴さへ、憤怒の聲ぞものすごき」待つかひありて
此度の「身は戦にあふひ草、忠孝二葉芳はしき、君
父に盡す時來ぬと」正行一族引連れて、急ぎ吉野に
参内す、病軀病に死すならば、君の御爲に不忠也
父の爲には不孝なり、この合戦に雌雄をば、いでや
決せん今生に、龍顔一たび拜さなむ「傳奏未だ奏せ
ねど、帝は御簾をか上げさせ、朕は汝を股肱とす、
身命全う慎めと、仰は重き勅諭に、涙を吞でよと
泣く」山松風のしみるくと、これや最後の御暇、告
げ奉る塔の尾の「御廟のうちは今も尙、英魂常にと

いまりて、北の方を、見ますらん」爰先帝の名残なる、如意輪塔の觀世音、憐れ楠家の一族が、髮の千筋を切りすて、唯一筋に誓ふなる、決死の忠義納受あれ」中さしの征矢抜き出で、塔の扉に正行が、鏃に残す言の葉の、跡は涙の語り草」かたり傳へて世にほふ、實に末代の鑑なれ」

城山

夫達人は大觀す、拔山蓋世の勇あるも「榮枯は夢か幻か、大隅山の狩坐に、眞如の月の影清く、無念無想を觀ずらむ」何を怒るか怒り猪の「俄かに激する數千騎、勇みに勇む速雄の、騎虎の勢ひ一轍に、留まり難ぞ是非もなき」只身一つを打すて、若殿ばらに報いなむ、明治十年の秋の末、諸手の軍打破れ、討ちつ討れつ頓て散る」霜の紅葉の紅の、血汐にそめどかへり見ぬ」薩摩武雄のをたけびに、打ちたる玉は板屋打つ、あられ手走る如くにて、面を向む方ぞなき」木靈に響く鯨波の聲、百雷一時に落つるが如き形勢を、隆盛打見てほぞ笑み」あな勇ましの人々や、亥の年以來養ひし、腕の力も試し見て、心に

残ることもなし」いざ諸共に塵の世を、のがれ出むは此時なりと、いひつ、筆をとり出し、

百戰無功中
廣同首邱幸
得返家山
吳復肉死
如仙客盛日
附中棋響閑

弧軍奮鬪破圍還 一百里程壁壁間
吾劍已摧吾馬倒 秋風埋骨故鄉山

と記し終るや否や、桐野村田を始とし、宗徒の輩諸共に、煙と消し大丈夫の、心のうちこそ勇ましけれ」官軍之を望見て「きのふ迄は陸軍大將と仰がれ、君の寵遇世の覺え、類なかりし英雄も」けふは敢なく岩崎の、山下露と消えはて、移ればかはる世の中の、無常を深く感じつ、無量の思ひ胸に滿、只悄然と隊伍を整へ、目と目を見合す許りなり」折しもあれや吹下す、城山松の夕嵐」岩間に鳴咽谷水の、無情の聲も何となく、悲鳴するかと聞なされ、戎衣の袖をぬらし添ふらむ」

俊 寛上

あだまもる、筑紫のはての薩摩瀉、鬼界が島の荒磯に、治承元年夏五月、流され給ひし人々は「右近衛の少將成經、檢非違使平入道康頼、法勝寺の執行俊寛僧都の三人なり」憂き艱難を此島に「送り給ふ其

中に、大赦の令をぞ傳へらる「思ひもかけぬとなれば、あらありがたき御誼やと、三人ひとしく跪き、うやくしくも令狀を、押載て成經は、うれしき涙に袖ぬれて、聲もふるへてさらくと、讀得給はぬ形勢を、康頼取りてやうくに、讀上げ給ふ趣は、此たび中宮御産の御祈禱に、非常の大赦行はるゝにより、鬼界が島流人の中、成經康頼を赦免すと、讀給ふ時俊寛は、あつと驚き首をあげ「何とて某が名を、讀落し給ふぞと、言葉せはしく問はれしに、康頼も打驚きて聲うるみ「實に不審となれど、御名は更に見え侍らず、俊寛聞て、扱は筆者のあやまりか、今一度讀せ給へとありけるを、使の元康進みより、某都にて承り候も、成經康頼の二人は御供致せ、俊寛獨りは此島に、殘し申せとの御言也、嗚呼こは如何に何事ぞ」罪も同じく配所も同じ、非常も同じ大赦なるに、獨り誓ひのあみに洩れ、沈むは何の因果ぞや」けふまでは、三人一所に在りてすら、さもおそろしくすさまじき、荒磯島に只獨り、離れて海士の捨草の「浪のもくづにあらねども、よるべもしらぬ浮身

やと、歎くにかひもなきなる、千鳥と共に鳴くばかり「思にあまる俊寛は、先に讀みたる巻物を、幾度となく打ち開き、あとりかりかへし見給へど、成經康頼とある計にて、僧都とも俊寛とも、かける文字は更になし「こは又夢かまほろしか、夢ならばさめよさめよといひつゞけ、獨り涙にくれにけり

玉兔晝眠雲母地 金鶏夜宿不萌枝

寒蟬抱古木 鳴盡不回頭

と云ふ詩の心は、俊寛僧都の身の上と、今こそおもひしられけれ

俊 寛下

去程に、時刻移りてかなはじと、梶子の強請に泣々も、名殘は更につさねども「成經は夜の衾を、康頼は、法華經一卷を、各かたみに殘し置き、さまぐなぐさめ參らせて、船に乗らんとしける時、俊寛は二人の袖にすがりつく「使の元康を揚げ「僧都は島にとりまれと、云ふを聞きたる俊寛は、嗚呼うたてやな公けの、私といふことあれば、せめては向ひの地までなりとも、情に乗せてつれてよと、涙を袖につ

みかね、よと泣聲聞もせぬ、無情の楫子がとり
 くくに、櫓權を持って打むとす。俊寛今は術なしと、
 すがる袂の手を放ち、一時は宿に歸らむと、踵はあ
 とにかへせども、かへらぬものは心にて、楫子の無
 情も元康の、怒る言葉も打忘れ、又立よりて出船の、
 綱にとり付き引とむる。楫子共綱をおしきつて、舟
 を深みに押出す。せむかた浪にをどりこみ、舟よ々
 々と呼はれど、かへす模様もあらざれば、力及ず俊
 寛は、もとの渚にひれふして、彼の松浦小夜姫の、
 歎きもわれに及ばじと、悲しみ給ふも哀れなり。時
 を感じては花にも涙をそそぎ、別れををしみては、鳥
 にも心を動かすと、いふとあれば人として、ながき
 別れの悲しみを、おらぬものこそなかるらぬ。され
 ば成経も康頼も、涙ながらにさし招き、我等都に登
 りなば、能きやうにとりなして、即て迎に參るべし、
 心強く待ち給へと、いふ其聲も幽かなる、頼みを濱
 のまつ陰に、聞くや如何にとゆふ浪の、よするまに
 く俊寛は、只手を合せ頼むぞと、呼はる聲も呼ぶ
 聲も、次第々々に遠さかる。舟もかすかに人影も、

消えて見えなくなりけり。あとに残りし俊寛は、
 やうく心とりなほし、歸りて見れば見るものも、手
 にとるものもことごとく、涙の種となりけり。

川中島

天文二十三年、秋のなかばの頃かとよ。上杉謙信は、
 八千餘騎を従へて、河中島に打て出づ。われ此たび
 の戦ひは、武田信玄を追つめて、親しく雌雄を決せ
 んと、渦巻かへす犀川を、渡りて陣をぞ取にける。
 信玄は此事を聞より早く、二萬餘騎にて打むかひ、
 砦をかためて戦はず。謙信は氣をいらち、村上義清
 に云ひ含め、月影くらき山々の、草葉の露をわけさせ
 て、彼方此方に兵を伏せ、樵に擬せし兵ものを、出し
 て甲斐の兵營に近づかしむれば、甲斐の兵、策とは露
 しらす、朝霧のまに追まくる。待ち設けたる伏兵は、
 時こそ來れと勝鯨波を、どつと舉つ、引包み、袋に
 物を取る如く一騎も残さず打取つたり。信玄怒て軍
 勢を、雲霞の如くに繰出せば、謙信も備へをたて、打
 向ふ。龍躍て雲を起し、虎嘯て風を呼ぶ、勢ひ破竹
 の如くにて、入り亂れ入り亂れ、責め戦ふありさま

は、颯風砂を巻き、百雷岩を、拔に異ならず、越後の勢
 退けば甲斐の軍是を追ひ、甲斐の軍退けば越後の勢
 是を追ふ、兵を合するに十七度、いづれを勝とら
 ま弓、ひくかと思えし信玄が、一と手の勢の職を伏
 せ、河を渡りてよしあしの、ひまを潜かに忍ばせて、
 勇み立たる謙信の、麾下近くす、みより、面も振す
 切て入る、麾下の軍勢は、思はぬ兵に敗られて、走
 る跡より甲斐の兵、鯨波を作て追かくる、宇佐美定
 行是を見て、猛虎の如く憤り、憤馬を駈て、大音に、
 我が手の勢に下知をなし、敵の横合より無二無三に
 突入て、淵瀬もいはず追落す、信玄度を失ひて、
 流れを亂して走る所を謙信只一騎、黄旗の逞しき
 に鞭をあて、賢子、いづく迄逃ぐるぞと、いひも果
 さず切りつくる、信玄刀を抜に暇なく、軍配扇にて
 受たれど、扇は二つに折られたり

降ると見て傘とる暇もなかりけり

河中島の夕立の雨

と謠ひし如く二の太刀は、早肩先に切り込みぬ、あつ
 といふまに信玄の、命は岩にくたかる、泡と消え

なむ危きを、救はんとして軍兵が、心はやたけに勇
 めども、水駛くしてちかよれず、隊將原大隅、鎗を
 のばして謙信を、突はしたれどあだ突し、斯てはな
 らじと鎗を揚げ、只一打にと打たりしに、馬にあた
 りて馬逸す、謙信馬をしづめんと、手綱搔繰其隙に、
 信玄は、虎口を遁れ去りにけり、

鞭聲肅々夜過河 曉見千兵擁大牙

遺恨十年磨一劍 流星光底逸長蛇

斯く信玄を、打もらしたる謙信が、心の中はいかな
 らむ、思ひやるだに哀れなり、信玄は肩の痛手に堪
 かねて、其夜の中に軍勢を、纏めて出る月影に、道
 を求めてはるくと、わが故郷に歸りけり、わが故
 郷に歸りけり

芙蓉峰

吳竹の、よに逆らはず、阿諛らず、高く聳えて動か
 ぬは、わが日の本の富士の山、あらびあらぶる神風
 も、吹倒し得ず岩がねを、砕かむ雨も流し得ず、嚴
 然たる其氣象、凜乎たる其威儀を、仰ぐ慷慨悲憤の
 士、拳を握り牙を齒み、われは人なり此さまに、な

どか劣らむ大御代の、事なき時に此氣象、養ひ置き
 て我國に、あだなす醜夷のある時は、腰間三尺の秋
 水を、抜く手も見せず切り拂ひ、進むで彼が名に誇
 る、ソラタ山なりエト十山、苦もなく取て我富士の、
 眞名子となしてくれむすと、日本橋頭に駒をたて、
 富山を睨むありさまは、實に雄々敷ぞ見えにける、
 嗚呼此英氣を鼓舞せしは、ひとへに富士の徳とかや、
 偏に富士の徳とかや、

辨内侍

あはれや落花情あるを、流水などか情なけむ、況や
 中もよし野河、はれて世にすむ妹山や、脊山のみね
 の月としも、まばしいさよふ程もなく、あかぬ別れ
 の村時雨、曇りやすきぞ是非もなき、茲に河内守左
 衛門尉楠正行は、天下の安危を身一つに、思ひ集め
 てみよし野や、吉野の宮に召され行く、頃は正平二
 年、名はすの末の冬の空、嵐にさほふ木の葉にも、
 穢たばしる玉笹の、消えを争ふ一族耶黨引具して、
 急ぎぞ來つる石川や、何騒ぐらん群千鳥、鳴く音亂
 る、彼所より、俄かに響く、人馬の矢叫び、敵か味

方か伏せ勢か、風に嘶く駒とめて、山下道を見渡せ
 ば、電光石火切り結び、落花狼藉泣叫ぶ、少女の聲
 の魂消は、必定曲者出たりな、いでや弱を助やり、
 強をくじきくれんと、馬上の正行最先に、刃をか
 さして切て入る、前より切りつ後より、突貫つ無二
 無三、當るを拂ひ逃るを追ひ、縦横無盡に確立し、
 撃電飛雷の早業の、其勢はさながらに、阿修羅王の
 荒れたるが如く、獸王獅子の狂るへるに似たり、
 野分の中の女郎花、おもはぬ人に救はれて、思ふ人
 とはなりにける、其正行に守護されて、吉野の宮に
 歸りゆく、辨内侍の綾の袖、濡るゝは露か露ならず、
 悲喜交々の涙なり、侍臣帝に奏すらく、逆賊高師直
 兼てしも、おもひを掛し辨内侍を、奪ひとらん企み
 して、既に石川の邊にて、軍卒あまた取り圍み、虎
 口危く見えけるを、ゆくりなくも正行が、危難を救
 ひ參らせて、事なく歸館せられけり、傳奏かくと聞
 し召し、帝は御簾をか、げさせ、汝正行なかりせば、
 いとも口惜しからましを、よくこそ助け計ひつれと
 て、内侍を正行に賜らむと、語りして下されぬ、何

に思ひけん正行は、綸言いともかしくみて、

とても世にながらふべくもあらぬ身の

假の契を如何で結ばん

と奏してこそは辭しにけれ「嗚呼味氣無の世の中や、
身はこれ右少辨俊基が、忘れがたみの姫小松、花の
匂ひはなけれども、操の色は深みどり、結び給ひし
妹と脊の、縁の糸の長かれと、いのりし甲斐も水の
泡、消なばきえねの心かや、時雨につらき松さへも、
清き雪には色かゆる、習ひもあるに君はそも、只假
初の契よと、いひすてまし、御心の、そこにはふか
きゆゑあらん」問はぬもつらし問ふはまた、いとど
耻かしとやしなむ、かくやとばかりとつおひつ、辨
内侍は心から、懸路のやみにふみまよひ、今一度の
逢瀬をと、跡を慕ひて行見しに、こはそも如何に正
行を初め、百四十二人の一族郎黨は、かゝれとて
しもなでざりし、其黒髪を切りすて、如意輪塔に
奉納し、扱正行が矢じりもて、塔の扉にとめたりし、
辭世のあとをよみみれば、

歸らじとかねて思へば梓弓

なき數に在る名をぞとむる

扱は我夫正行君、かゝる覺悟のましくて、假の契
を結ばじと、さとしまし、かそれとしも、淺澤水の
いと淺き、女心のはかり兼、つれなき君と葛の葉の、
うらみじとの耻かじや、「この山寺の法の風、今のま
よひを吹きかへて、死なば未來は彼の國の、一つ蓮
の花の上、各留半座乘華臺待我閻浮同行人」みじか
き假の契をば、長き誠の契とも、結びかへたるうれし
さよ、「帝の御爲君の爲、我が身もかくや返しせん、
大君に仕へ奉るも今日よりは

心にそむる墨染の袖

誠しあらば心なき、空行く雲もたゞよはん、況や正行
木石にあらず、今や決死の出陣に、契らぬ妻の眞心
を、身につまされて流石にも、斷腸の思ひやるせな
く、不便の者よ健氣なる、我妻なれとそらるにも、
鎧の袖をぬらしけり、鎧の袖を濡しけり」

夢

夢が浮世といふとも、浮世が夢といふとも「悟れば
眞如の月一個、空に輝くばかりなり」莊周夢に胡蝶

となり「花の袂に戯れしは、周の夢に胡蝶となりしか、胡蝶の夢に周となりしか、何れを夢とわれながら、知るよしもなき假の世は、うきより憂に迷ふらむ」されば浮世を苦とせんか、一刻も千秋の思ひ、又樂とせんか、千秋も一刻にすぎざるべし「苦樂件ふ賤が家に、もゆる妻木も高殿に、にほふ香爐も影淡く、煙と消えむ人の身は、憐といふもおろかなる」一首をこゝに書とめて、

蓋世英雄歎老來 傾城美女怨春回
人間畢竟香爐似 半作雲烟半作灰

左は去ながら人世は、古往今來七十稀なり、何を苦むで託すべき、よしや謠はむ桃李曲「夫天地は萬物の逆旅」光陰は百代の過客、浮世は夢の如く、歡を爲こと幾何ぞ「古人燭を乗て夜遊ぶ、良に故あるなりと、謠ふ折しも隙間洩る、夜半の嵐に燈火の、光り瞬く寢室のうち」獨り感慨の筆をとり、うつゝに流す水莖は、

憂とのまだ覺やらぬうたゝねに
夢より夢の浮橋渡る

とよみし心は誰も彼も、知るや知らずや大空の、空敷ものを手にとりて、世に抛ちし先哲は、いかに悟りを開きけむ「嗚呼思ひ去り、思ひ來れば結ばれし、我が煩惱は解けやらで、迷に迷ふ五十年」四十九年の非を知りし、人はいつこに烏羽玉の、夜は森々と更にけり、夜はしんぐとふけにけり」

潯陽江

紅葉うつろひあしが散る、秋の哀れのいとふかき、潯陽江の夕間暮「友の船出を送り來て」別を惜む盃の、かす重なれど糸竹の、しらべもそはぬさびしさ
に、本意なきこと思ひつゝ、影遠白き波の上の、月打守る折しもあれ、忽ち聞ゆる琵琶の聲「思も掛ぬとなれば、互に心悸きて、歸らむとも行とも、忘れ果つ、其聲を、尋ねて誰ぞと音なへば、打ひそまりて答なし」舟漕よせて酒を添へ、燈火か、げ又更に、宴の筵打開き、琵琶の主を招けども「頼には出さず百千度、呼立られてしぶくに、こなたの舟に移り來ぬ」琵琶を抱きてまばゆげに、面を掩ひ彈初めし、其撥音にいひ知らぬ、深き情のこもりつゝ、彈行ま

に常々の、おのが心のうれたさを、訴へ出る心地
せり。人こそしらね濱木綿の、百重かさなるうき思
ひ、積る怨のかずくを、四筋の糸にいはすらむ、
軽く打ちゆるくひねり、拂つか、げつ初には、霞裳
を奏で、後には六么を弾じけり、

大絃嘈々如急雨 小絃切々如私語

嘈々切々錯雜彈 大珠小珠落玉盤

間關鶯語花底滑 幽咽泉流水下灘

氷泉冷遊の趣、凝て、糸を絶え、若ばし聲なき其程
は、そゞろにうれひを催して、聲あるよりも中々に、
風情をそへし折しもあれ、再び響く撥の音、銀瓶碎
けて水入り、軍起りて打物の、刀稜を削るに鬚髯た
り、曲も今はとなりし時、撥を収めて四の緒を、只
一聲にかきなせば、さながら帛を裂如し、東の舟も
西なるも、只悄然と聞惚れて、物いふ人もあらばこ
そ、秋の浦風身にしみて、水底白くすみわたる、月
の影こそ更にけれ、衣をつくろひ居をほりて、語る
詞も口籠りて、妾も元は都なる、蝦蟇の陵下の産れ
にて、十三才の頃よりも、琵琶の上手と世に知ら

れ、玉を飾れる宮の内、金を敷ける臺にも、召し登
せられ遊士の、かなたこなたの會にも、招きよせら
れ戯れあひ、さゞめきかはし綾錦、かつぎ歸へれば
家も富み、身も榮えつ、世の中は、斯あるものと愚
かにも、思ひ頼みて花の春、紅葉の秋と等閑に、日
を経るほどに同胞に、親族に離れ夕去き、朝來りて
顔花の、さかりもいつかすぎの門、馬も車もよせ來
ねば、世渡るたつき盡き果て、身を浮草の根をば絶
え、水のまに、誘れて、情も淺き商人を、夫とす
るだにはかなきを、其夫遠く旅立し、此浦舟に夜を
守る、月明かに水寒み、ふけ行くまゝに、まどろめば、
わが身のさかり夢に見て、いとかなしき増りぬと、
語るを聞て思はずも、太きためいきつくと、琵琶
を聞だに悲しきを、此物がたりの哀れさよ、始め
て逢る此人と、身の際こそはかはれども、われも同
じく浮沈み、去年よりこゝに流離て、潯陽城の片ほ
とり、あしと竹との生ひしげる、いぶせき中に家居
して、旦夕に聞ものは、高嶺の猿ほととぎす、樵夫
の歌、總角が、吹鳴す笛の聲ばかり、かへりて胸を

痛めつゝ、病いやます心地して、むかし聞つる糸竹の、音をつかしく思ひしに、今宵の君が琵琶の聲、天津少女の音楽を、聞く心地して、いとうれし、いなむことなく今一つ、彈て聞せよ予も亦、うたを作りて贈らむと、いへば實にもと思ひけむ、又も彈ずる撥音は、前のこゑよりいそがしく、物凄ければ江州の、司馬は更なり並居たる、人も袖をぞおほりける。

石童丸

月に村雲花に風、心のまゝにならぬこそ、浮世にすめる習ひなれ」茲に筑前筑後肥前肥後、大隅薩摩の守護職に、加藤重氏其人は、無常を感じ世をすて、諸國修行に出給ふ」跡に残りし妻や子は」思ひ待つこと十四年、父上高野に在りと聞き、石童丸は母上と、昔の小笠を傾けて」旅の勞れも厭ひなく、漸く高野の禿宿、やどり給ひて二人とも、あすは逢んと悦ぶも、女人禁制の山なれば、せんかたなくも母上を、麓にのこし參らせて、石童丸は只獨り、心細道分けながら、峰の薬師や瀧不動、手を合せつゝ、伏し拜み、さびしさいはんかたなくも、其夜は其所に假

寐して、笠の屏風に腕枕、諸行無常と告げ渡る、鐘の音いと身にしみて、九百九十の寺々や、峰谷々の阿彌陀佛、菩薩を念じ尋ねれど、父ぞと思ふ人はなく、三日二夜は早過ぬ」ふもとの母を案ずれば、後に引るゝ心地して、松吹風の音までも、母の聲かとうたがはれ、

ほろ／＼と鳴山鳥の聲きけば

父かと思ふ母かと思ふ

と行基菩薩のよまれたる、歌の心も思はれて、歩むともなく、あゆみつゝ、無明の橋を越え來れば、左に花を右に數珠、光明眞言唱へつゝ、荻萱道心下り坂、見上げ見おろす顔と顔、石童丸の振袖と、高祖の袖ともつれあひ、はなれがたなく見えけるは、深き縁のあるならん」其時袖に縫り付き、あな御僧よ御山の、今道心を此われに、教へて給と請ふさまの、哀に見ゆる幼子が、腰にさしたる脇差は、見覺のある品のみか」花の顔月のまゆ、何處か母に似てあれば、いかにも不思議に堪へねども、じつと耐忍ていへるやう」尋ぬる人の名をかきて、札場に建つれ

ば逢ふとも、あらむと聞きし石童が、途方にくれし形勢を、哀と思ひ手を取りて、おのが住家に連れ歸り、國は何所名は何と、問はせ給へば石童は、せきくる涙押とどめ、國は筑紫の松浦瀉、加藤左衛門重氏が、あすれ形見の石童と、聞より苺萱胸せまり、落つる涙をとめ得ず、石童それと悟りけん、若し父上にてましまさば、明かしてたべと前に寄り、後ろに回り苺萱の、顔覗き込み懇ろに、請はるゝ時の石童を、嗚呼可懷我子よと、いふて抱よせ名乗らんと、思ひ給へど名のりかね、其苺萱は去年の秋、空敷なりぬと宣へば、石童わつと泣伏して、生る人とも見えざるを、苺萱ちゝに慰めて、墓場に連れ行き指をさし、これこそ父の墓なれと、教へ給へば石童は、力なく、跪き、涙にぬれし袖袂、絞りもあへず香を焚、雪より白き手を合せ、南無彌陀佛と伏し拜む、姿を見つる苺萱は、胸も張裂くばかりなり、十年に餘る修行にて、生者必滅會者定離、本來空の理りを、悟りながらも恩愛の、情には脆きものなるか、墓場に倒れし石童を、抱き起して徐ろに、涙は

佛の爲ならず、ひとたび下りて母上に、此事いうて回向せよと、諭されければ石童は、泣々山を下りつゝ、母に告むと来て見れば、哀れなるかな母上は、石童丸を待ち兼て、麓の野邊に枯残る、草葉の露と消え給ふ、嗚呼父上に生別れ、又母上に死別れ、天にも地にも只獨り、便りとするは姉ばかり、逢うて此事語らんと、歸りて見れば姉もまた、此世を去りて影もなし、さても強顔浮世哉、更行夜半に霜冴えて、磯山松は音もなく、千鳥繁鳴松浦瀉、浪に漂ふ捨小舟、引人もなき石童は、高野にありし其時に、隣み給ひし御僧の、外に便るはなしと知り、再び登り苺萱の、庵尋ねて御弟子にと、請はれて苺萱是非もなく、打連立て國々を、修行なしつゝ信濃なる、國に住所を定めさせ、師弟と名乗るばかりにて、親子地藏と稱へよと、遺言し給ふ哀さよ、信濃に名高き善光寺、石童寺の本尊に、親子地藏の在すなり、親子の縁は斯迄に、断ても断ぬものなるぞ、今は昔の物語り、南無や大悲の地藏尊、南無や大悲の地藏尊

小督

比しも秋の央の空、詠め勝なる御袖の「涙の露を拂はせ給ひ、宿直に侍らふ、彈正の大弼仲國を召され、如何、仲國、小督の行衛を知りたるか、内裏を逃れ出しより、嵯峨のわたりに聊の、知人便りて在りと聞、汝いかにもして尋出で、此文傳へよとの仰なり」仲國つくく思ふやう「嵯峨のわたりと計にて、主の名をだにしらざれば、尋ねむやうはなけれども」小督の殿は世にしられたる、琴の上手におはすれば、今宵最中の月かげに、君の御上おほしいで、調べ給はぬとはよもあらじ」兎にも角にも尋ね出で參らせて、叡慮を休め奉らむと、心に思ひ定めつゝ、畏りぬと聞えあげ、即て御前を罷り出で、寮の御馬に打乗りて、隈なき月に鞭をあげ、小鹿鳴く此山里と詠じけむ「嵯峨野の奥にわけいれば、きらめき渡る白露に、尾花が袖も打しめり、鳴かはしたる蟲の音に、浮世の善惡も思はれて」獨り心を痛めつゝ、家あるごとに立よりて、問へど知る者更になし」如何はせんと駒をたて、茫然としてありつるが、若し寶林寺に

やおはすらむと、龜山近く到りしに、賤垣遙に聞えたり「峯の嵐か松かぜか、尋ぬる君が琴の音か、認つゝゆけば一と村の、松のかげなる片折戸」内に聞ゆる爪音を、手綱ゆるべてつくくと、聞けば誠や月花の、御遊の筵に侍りて、笛の役仕ふまつりし時、聞覚えつる調にて、殊更曲は想夫戀」さてはまされもあらじとて、腰より窈窕ぬきいで、少し計り吹きならし、やがて駒より飛おりて、門をほどくと叩き、是は仲國內裏より、御使に參りたり、開させ給へあけさせ給へと訪問に、琴彈さし静まりかへりて音もなし」やゝありて、傷い氣したる小女房、門を細目に明ながら、顔計り差出して、あやしの賤が伏庵に、内裏より御使など、給はるべきにあらず、門違にや侍らむといふに「仲國惣に應しては、門さくれむとおもひければ、是非なく押開て内に入り、妻戸の椽にすゝみより、何とてかゝる所には、御渡り侍らふぞ、君には明暮思し沈ませ給ひ、つや〜供御も聞し召さず、打解御寢もならせ給はず、ほど〜御命さへ、覺束なふこそ見え給へれ」かく申さ

ば、上の空にやおはすらむと、御消息を参らすれば、
「あらなつかしの雲井やと」御文顔にあて給ひ、おぼ
し言葉も涙の雨に、晴たる月も曇るらむ」仲國も、
そゞろにせきくる涙を押へ、兎角慰め参らせつゝ、
上の衣絞る計になりけり」やゝありて、御かへり
事引結び、女房の装束一と重ね、賜りければ肩に掛、
君にもさこそ待侘ておはすらめ、重ねて御迎には参
るべし、待せ給へといひすて、駒を早めて立歸り、
ありし次第を残りなく、奏する程にはのくと、秋
の長夜も明けにけり、秋の長夜もあけにけり」

錦の御旗

天照す日の影うつる、眞名井の流末清き、瑞穂の國
は昔より、武勇忠義の人多し「元弘年中の比か」とよ
後醍醐帝の三の皇子、大塔の宮と聞えしは、出家の
身にてましませど」父の御爲國の爲、義兵を擧て逆
臣を、征伐せんとの御企、早くも賊に漏しかば、四
方の備嚴しくて、比叡の奥にも南都にも、身を置き
給ふと難く、熊野を指て落給ふ「股肱の人は誰々ぞ、
赤松律師、光林坊、木寺の相模、三河坊、片岡八郎、

武藏坊、平賀の三郎、矢田彦七、村上義光の九人に
て、柿の衣に笈を負ひ、頭巾眉深に被りて、先達作
りて山伏の、熊野詣に準へたり」龍樓鳳闕に成長
輕軒香車を出さまぬ、雲上人の御歩行の、長途いか
にと御供の、人々危く思ひしに「社々の御祈、やど
りくくの御勤、露も怠り給はねば、勤修を積める
山伏も、見咎むる者更になし」由良の港を見渡せば、
沖漕舟の楫をたえ、浦の濱木綿幾重とも、知らぬ浪
路になく千鳥」紀路の遠山渺々と、薄紫の藤代の、
松にかゝれる磯の浪、和歌吹上の浦かけて、月に瑩
ける玉津島、ひかりを餘所に伏し拜み、長汀曲浦の
旅の路、心を碎く習ひなり、雨を含める孤村の樹、
夕を送る遠寺の鐘、哀を催すたそがれに、切目の王
子に着き給ひ、叢祠に袖を片敷て、朝家の榮えを祈
ります」斯くて十津川の、戸野竹原便りて、暫し居
給へど、こゝにもながくありかねて、高野のかたへ
と落給ふ」茲に妹加瀬莊司とて賊に一味の士の、宮
をさへへて申すやう、此道通し申しなば、鎌倉より
は罪せられむ、さはいへ宮に弓引くは、如何にも恐

れ多ければ、錦の御旗賜はるか、左なくば一人の御供を、止めて證據にせむといふ」股肱の臣をひとりだに、いかでか残し給ふべき、詮方なくも御旗をば、かれに與へて虎の口、僅にのがれ給ひけり」かゝる所に、村上彦四郎義光は、草鞋の緒や切れにけむ、遙に後れたりしかば、宮に追ひ付き申さんと、足疾く過ぐる折しもあれ、莊司に確と行き逢へり、下人が持てる旗見れば、正敷錦の御旗なり、不思議におもひ尋ぬれば、事しかく」と答ふるに、村上之を聞も敢へず、赫と怒りて打睨み、こはそも如何に何事ぞ、かたじけなくも畏くも、四海の主に御坐ます、天子の御子朝敵を、追討あらむ其爲に、御門出の道なるに、汝等如き下郎輩、かゝる振舞すべきかと、持たる旗を奪ひ取り、大の男を搔攪み、四五丈計投たるは、獅子の荒しに異ならず、此怪力に恐れけん、妹加瀬莊司、一言も、半句もなきて、竦みけり」義光御旗を肩に掛け、程なく宮に追ひ付きて、御前にひれ伏し事の由、具に申上しかば、宮は喜び給ひ古の、北宮勤が勇氣にも、立勝れりと愛ましぬ」義光は勇のみこそは仰がるれ」

ならず、吉野の奥の戦に、宮に代りて討死し」御旗に打たる日月と、光争ふ忠臣と、義士と稱へて萬代も、君に仕ふる人臣の、鑑とこそは仰がるれ、鑑とこそは仰がるれ」

吉野 落上

美よし野の、花も立田の紅葉も、夜半の嵐にさそはれて、あだに散り行く時はまた、ましてあはれにおもふなり、茲に二階堂出羽の入道道蘊は、元弘三年正月に、六萬餘騎を従へて、大塔宮の日比より、籠らせ給ふ大和なる、吉野の城にぞ攻め寄する」菜摘川の邊より、吉野の方を見上ぐれば、白旗赤旗錦の旗、深山嵐に打ちなびき、雲か花かとあやしまれ」麓には敵の大勢すさまなく、甲の星を輝かし、鎧の袖を連ねしは、錦を敷に異ならず、峰高うして道ほそく、山險うして苔滑かなり、幾千萬の鋭兵が、必死になりて攻むるとも、容易落つべしともおもほへず」かゝる所に、同じく十八日卯の刻より、兩陣鯨波をどつと揚げ、敵攻め登れば攻め下し、互に勇氣を振ひつゝ、此處の谷彼處の峰に、走散て、攻合ひ

開き合ひ、射手を揃へて散々に、射立たれど寄手の兵は、命を知らぬ坂東武士、親討たれても顧みず、主倒れても取りあはず、屍を乗越々々、七日が間、息をもつかず、攻め戦ふ。血は草芥を染め、屍は路頭に横はる、かゝる所に寄手の案内者、岩菊丸は足輕共に、下知をなし、金峯山の嶮を越え、木の根岩角攀のほり、在々所々に火をかけて、鯨波を作つて攻ければ、城兵も今は前後の敵を防ぎ兼ね、自害する者もあれば、猛火のうちに走せ入て死するもあり。向ふ敵と引き組んでさしちがふる者もあれば、宮に注進する者もあり。大手の堀は忽ちに、死骸を以て埋めたり。宮は此よしをきこし召し、赤地の錦の直垂に、緋威の御着脊長に、龍頭の兜を召させられ、金作の御太刀佩せ、三尺五寸の小長刀を、脇に挟みて屈竟の、兵共二十餘人、前後左右に率ゐ給ひ、群る敵に切て入り、砂子を飛ばし煙をたて、東西を打ち拂ひ、南北に追まはし。茲を専途と戦ひ給へば、寄手の大勢も此二十餘人に切りたてられ、風に木の葉の散る如く、四方へ颯と引きにけり、宮は是より藏王

堂の大廣場に悠々と、引き揚げ給ひて軍兵と、最後の御酒宴をぞ遊ばされける。此戦に宮の召したる御着脊長は、七筋の矢に貫れ、頬先と二の腕に二ヶ所の突疵負せ給へど、立たる其矢も抜かせ給はず、流るゝ血汐も拭はせ給はず、敷皮の上に立ながら、大盃をみたびまで、傾け給へば木寺の相模、四尺三寸の太刀先に、敵の首をさし通し、宮の御前に畏り、聲高らかに謠ふやう、戈鋌劍戟を降すと電光の如く、盤石山岩を飛すと急雨の如しといへども、天帝の身には近づかず、却て修羅彼れが爲に破らるゝと、太力振かざし舞ひたるは、漢楚の鴻門に、楚の項伯と、項莊と劍を抜いて舞ひし時、樊噲庭に立ちながら、幕をかゝげて項王を、睨みし勢も、斯やと覺ゆる計なり。

吉野落下

去程に村上彦四郎義光は、餘りはげしく戦ひて敵に矢十六筋を射付けられ、篋中の節や袖摺の節より折れて立たるは、枯野に残る玉萩の、風になびくが如くなり。其矢を抜くにいとまなく、宮の御前にひ

れ伏して、一の木戸は早破れ、今二の木戸にて支ふれど、連日の戦に、軍兵共は打死し、とても籠城覺束なし、敵四方を圍まぬうち、早く落させ給ふべし」臣は恐れ多き事ながら、召させられたる直垂や、御物の具を頂戴し、御諱をも犯し参らせて、茲に戦死を仕らんと、忠義面にあらはれて、いと懇ろに申し上ぐれば「宮はあはれに思召し、いかでか去る事のあるべきぞ、死なば所をかへずして、吉野の山にかむばしき、名を残さむと宣へば、義光聞も敢ず、嗚呼淺間敷仰哉、昔漢の高祖が、荊陽に圍れし時、紀信高祖の眞似をなし、楚を欺かんと請ひたりしに、高祖はこれを許したり」是らの御覺悟あらせられずして、天下の大事を能もおほしたゝれたり、早御物の具下し賜はれと、御着脊長の上帯を解奉れば、宮も實にとやおほしけん、御着脊長も直垂も、ぬがせ給ひて義光に「手づから渡し宣ふやう、われ若し生のびたらば、汝が後生を弔はん」又打死なしたらば、同じ冥土に件ふべし、是今生の別れぞと、言葉すくなく宣ひて、涙ながらに落ちさせ給ふ」義光もせきくる涙を押へ

つゝ、木戸の櫓に走せ上り、大音揚て名乗るやう、我は是れ 神武天皇より九十六代の孫、今の帝の第三の皇子、一品兵部卿尊仁親王なり」逆臣輩にやまされ、恨を泉下に報いむ爲、只今自害する所也、是れを見て汝らが身に備へたる武運盡き、腹を切らん其時の、手本にせよと呼はりて、鎧を抜て投落し」錦の直垂に練貫の、二重小袖を引きくつろげ、諸肌抜て一刀を、左の腹へぐつとたて眞一文字に引まはし、あけに染みたる腸を、櫓の板に投付て、太刀先くはへうつ伏しに、伏して果たる義光が、最後のさまこそ勇ましけれ」敵兵是を見て、大塔の宮は御自害召されたり、御首給はらんといふまゝに、四方の圍を打すて、櫓のもとに走集る」宮は是と引ちがへ、天の河へと落給ふに、敵五百餘騎道をさへぎりければ「義光の一子村上兵衛藏人義隆は」父が教に従ひて、一人茲に踏といまり、追ひ來る敵の馬の、諸膝薙ては切りすゑ、平頸打ては刎落し」右へ突のけ左へ蹴倒し、飛蝶の如く飛廻り、猛虎の如くたけりたて、九折なる細道に、五百餘騎を引受て、半時ばかり

り支しが、いかに義隆強の者とはいへ。身鐵石にあ
らざれば、深手の矢疵十餘ヶ所、薄手の疵はかずし
れず。今は是までとや思ひけん、とある竹むらに走入
て、腹搔切てぞ失にける。此ひまに、宮は虎口を通
れ給ひ、高野山へ落ち伸び給ひしは、村上父子が美
よし野の、花と散にし其勳功。立田の秋の紅葉の、赤
き心によるとかや、あかき心によるとかや、

本能寺

麻と亂る、戰國の、人といへば誰も彼も。馬を養
ひ兵を練り、糧を收めて劍を磨す。比は天正十年夏
五月、徳川家康封せられ、安土城下に入りしかば、
織田右大將信長は、いと鄭重に迎へんと、直に惟任
光秀に、響應の役をぞ命ぜらる。御受致せし光秀は、
亂れたる世に心得し、都の手振見せばやと、さしも
目出度勤めしを、小人ばらの言により、善美過分の
評を受、疑心暗鬼は信長の、胸にやどりし時も時、
羽柴秀吉中國より、援けの兵を請ひしかば、嚴命忽
ち光秀の、首べの上にぞかいりける。光秀私かにお
もふやう、人もあらんに此我に、羽柴が命に従へと

は、あな情なの我君やと、齒嚙をなして恨みしは、
君に仕ふる人臣の、よもあるまじき事なれど。又信
長を見る時は、右大將とも仰がる、身に、粗暴の振
舞いと多く、ある時は蘭丸をして、光秀の首に鐵扇
を加へさせ、又或る時は、好まぬ酒を殊更に、我意
を通して勸めしめ。志賀の都の領地さへ、三とせの
うちには事なくも、奪ひ取られむ説を聞き。今また産
を傾けて、新たに來りし家康に、心盡しのもてなし
も、琵琶湖の水の泡と消え、抑へし焔むらくと、
もゆる思ひの光秀が、拳を握りて立上り、動く睫の
間より、由々敷大事のほの見えしを、露程知らぬ
信長は、諸將を安土にとりめ置、親から近臣百餘
人、引隨へて京都なる、本能寺にぞ入にける。時こ
そ來れと光秀は、田鶴も遊ばぬ龜山に、從子光春等
を召し寄せて、積る恨みの數々を、數ふるうちに光
秀が、眼は血汐ほとばしり、逆立髪は冠を、突く勢
ひを見てとりし、光春共が百千度、諫る言葉も聽か
ばこそ、推て謀反に加盟させ、暴戻無道の弒逆を、
企てしこそ淺ましけれ。斯て士卒を打揃へ、中國勢

を援はんと、偽り向ふ大江山、心の駒も鳥羽玉の、
闇路を急ぐ許りにて、さしも忠義の光秀が、追々年
も老の坂、如何なる道や迷ひけむ、無念至極の胸の
中、亂れて濁る桂川、渡らむ駒の足なみは、東さし
てぞ進みける、

本能寺溝深幾尺 我就大事在今夕
菱粽在手併菱喰 四簷梅雨天如墨
老坂西去備中道 揚鞭東指天尙早
我敵正在本能寺 敵在備中汝能備

爰に初めて軍勢は、漸く一心と覺りしが、これも我
君是非もなし、すつる命は一ぞと、時しも六月二日
の朝まだき、露の身軽き軍兵が、本能寺をとりかこ
み、関を作りてぞ攻め入りける、此物音に信長は、
寢覺の耳をそばだつれば、紛ふかたなき人馬の聲、
館間近く聞ゆるに、枕を蹴て立上り、疾く見届よと
ありければ、森蘭丸畏り、表の方に走り出、見越の
松に片手を掛、右手をかざして見てあれば、雲か霞
か白旗に、染めたる桔梗の紋所、見るより蘭丸引か
へし、光秀謀反と答ふるに、嚇と怒りて信長は、者

共覺悟と呼はりて、弓矢おつとり立向ひ、寄せ來る
敵をもものともせず、瞬間ひまに數十騎を、矢繼早に
射て落し、勢ひ鋭く拒ぎしも、只一筋と信長が、頼
む弓弦ふつと切れ、得たりとつけ入る豪敵を、す
かさず弓もて打つて伏せ、兎角するうち信長も、左
手の腕に痛手を負ひ、蘭丸代つて拒ぐうち、宿直の者
も悉く、命を的に戦へど、衆寡敵せず信長は、最早
是迄とや思ひけん、自ら館に火を放ち、煙の中に飛
び入つて、刃に伏してぞ果にける、嗚呼豪邁の信長
が、空をも蔽はむ大鵬の、圖南の翼中空に、燕雀の
爲に惱まされ、終世の望み絶えたるは、獅子身中の
蟲に倒れたる、そしりを受けて人皆の、口に殘るも痛
ましき、續て蘭丸を初とし、坊丸、力丸の小性共、未
だ若木の櫻花、嵐の山の朝風に、いとも床しき香を
留めて、ちるやちり、いとやさき、百有餘人もろと
もに、哀れ本能寺の、朝の煙と消えにける、

研得たる心ゆるすな十寸鏡

思はぬちりのかゝる世の中

情々古今を按ずるに、人に君たる王侯の、心すべき

は徳にこそ、心すべきは徳にこそ

毒 饅 頭

笑へば子女も懐かしめ、怒れば虎も恐れしむ」英邁
偉絶の豪傑も、まかせぬものは涙なり」茲に加藤肥
後守清正は「知遇の恩に身をすて、四。百餘州を我
駒の、蹄に蹴むと勇みしも、醒めて果なき夢なれや」
哀れ太閤世を去りて、世嗣の君は幼なし、石田小西
の小人等、必ず事をあやまたむ、一度は死する此身
體、すてい甲斐ある時や來む」されど仁義の深き家
康に、心の弓も引き切れず、さりとして幼君も捨られ
ず、心二つに身は一つ、流石鬼神の清正も、困じ果
てぞ居たりける」是より曩に京都なる、二條の城に
幼君が、成らせられたる其時に、御供なせし清正に、
豊國神社の御供物と、いふてもてなす毒饅頭、毒と
は知れど家康の、股肱の臣の澁川は、それとは知ら
でおのれ先づ、毒味をなしてすいめつる、其真心を
いなみかね、一つを取りて味はへば、身體は日々に
衰弱し、とても餘命は永からじ、命あるうち今一
度、最後の御目見得賜はりて、歸國の御暇願はんと、

片桐市之正且元と、共に出仕をなしにける」此時幼
君の秀頼公は、今年漸く御七つ、淀君附添出でまし
て、太閤殿のはかなくも、御他界ありし其後は、頼
みきつたる御身迄、歸國をなすは家康の、威に恐れ
ての事なるか、但し又、外に望みのありて歎と、恨
みを含む一言に、清正伏て申す様、朝鮮までも武名
をば、轟かしたるなれの果、いかでか恐れ申すべき」
且又外に望みもなきからだ、家康公と申奉るは、仁
義に富める御大將、無道の事はなされまじ」千に一
つもなされなば、大阪城の鐵壁に、おとらぬほどの
且元あり、老はしつれど此清正、他事に見過し申さ
んや、第一番に駈付けて、敵を蹄にかけ散し、御心
休め申さんと、いと頼母敷言上に、歸國の願ひ許さ
れぬ」裂帛一聲不如歸と叫ぶ」山郭公血に鳴も、我
身の上と清正は、心に思ひあきらめて「秀頼公に打
ち向ひ、此清正のなき後は、只且元の諫言を、心寛
くも容られて、徳川殿を父君と、仰ぎ給ひて關東に、
必ず弓を引かせ給ふなど、いと懇ろに申上ぐれば、
秀頼公は聞こし召し」爺の言葉は守れども、病の爲

に歸國せば、最早こゝへは參らぬか「病つのならばみづからが、みとりをなして遣はさん、國に待つものあるならば、そは呼よせよと仰せける」鬼神をあざむく、清正も、御側に侍ふ且元も、聞居給ひし淀君も、胸も張り裂く思ひにて、皆一同に俯伏しぬ「果しなれば清正は、心を鬼と取り直し、御暇申して出ければ、秀頼公はたゞせられ、爺よ々と跡を追ひ、袖を引てぞ泣給ふ」猛虎を挫く清正も「幼き御子の腕には、引かれて元の坐にかへり、秀頼公を抱き上げ、つくづく顔を見上げる」頑是なき秀頼公、うるむ目もとに清正の、髻に縋りて別れをば、おしみ給ふのいぢらしさ「即て御所持の中啓を、形見に取らせ遣すと、下し賜へば清正は、聲も得たてず伏し拜む」嗚呼幼君がかほどまで、したひ給ふも清正が、無二の心の誠より、あらはれ出る光りにて「君に仕ふる人臣は、斯くありてしものと思ふなり、斯くありてしものとおもふなり」

奇縁

良禽は、樹を擇んで棲み、良臣は、主を撰で仕ふと

かや「爰に故左馬頭源義朝の子に「牛若丸と呼るは、父の義朝討れし後、母諸共に生捕られ」未だ黒白もわかぬ身の、出家になれとて行先も、鞍馬寺にぞ送られける」月日に關のなくくも、明し暮らして人となり、思へば無念やるかたなく、平家を討つて父の仇、報はでなか止みなんと、獨り心を痛めつゝ、うき節をげき吳竹の、よなく寺を忍び出で、月清水の観音へ、今宵も歩を運びつゝ、心願成就させ給へと、心をこめてぞ祈らるゝ「扱又西塔の武藏坊辨慶は「獨りつくづく思ふやう、かゝる亂れし世に生れ、墨の衣を身に纏ひ、香花をとりて佛前に、あたら此世を此まゝに、朽果る身のあるべきぞ」よしや不動の利劍を振り、人を切るとも殺すとも、爪繰珠數の紐きれて、みだれむ此世を鎮むべき、功だにたゞば中々に、衆生濟度の道ならむ」いでや心のまゝに振舞て、後世に名をも揚べしと、既に不敵の心を起し、夜な／＼洛中を徘徊して、往來の人をおびやかし、太刀刀を奪ひとり、人の剛臆ためし見るに、手に立ものゝあらざれば、愈我慢増長し」今

宵も清水の観音へ来て、群集人を覗きしに、十四五許の公達の、讀經なしつゝ在するを、牛若丸とはつゆしらず、近く差寄窺ふに、容顔まことにうるはしく、徒人としては見えざるが、つくづく見れば、紛れなく、先夜出會うて不覺をとり、無念の残る其小性、能き所にて出會ふたり、思ひしらせむと悦びて、牛若丸の歸り道、窺ひてこそ居たりけれ、機敏達智の牛若は、早くもそれと見留ても、そしらぬさまにて經を畢、悠々寺内を立出て、五條の橋にさしかゝる、比しも秋のなかばの空、更る川風身にしみて、月すみわたる橋のうへ、行とはなしに歩みつゝ、往かふ人も影絶えて、こゝろすごげに誰聞けと、腰より窺取りいで、吹すさみつゝ渡り行待まふけたる辨慶は黒革威の大鎧、草摺長に着なしつゝ、例の薙刀杖と突き、牛若丸の行先に、立ふさがりて云ひけるは、如何なる人ぞ夜更て獨り、見ればよき太刀佩れたり、われに與へて罷られよ、左なくば通り得させじと、礮と噴んで立たりけり、牛若聞いてあざ笑ひ、ほしくば此太刀取て見よ、むざと獲さずる

ものかはと、いはせもあへず辨慶は、薙刀取て引そばめ、悪き小性の云ひ條かな、さらば斯くぞと切て掛る、牛若臆する氣色なく靜かに薄衣引のけて、太刀拔かざし渡り合ひ、暫し戦ひ攻めあひしが、たゞみ重ねて打太刀に、さしもの辨慶あしらひかね、橋桁二三間飛びしざりいたく肝をぞ消したりける、されど甲斐なき少年に、何程のことのあるべきぞと、更に勇氣を勵まして、薙刀柄長に追取伸べ、走り掛つてなぎ拂へば、左にはずし右にさけ、裾を拂へばおどり越え、頭をなげばついでり、前にあらはれうしろにせまり、さながら花にたはる、蝴蝶の如く、空に飛かふ燕に似たり、辨慶秘術を盡せども、姿もさだかに認め得ず、次第に氣力も勞れ来て、たゆむすさまに辨慶は、薙刀もろくも打落され、茫然としてぞ立たりける、不思議や御身はいかなれば、かほどけなげに在するぞ、委敷名乗らせませませと、辭を改め云ひければ、予は源の牛若なり、汝は誰ぞと問ひ給ふ、さては義朝の御子に在するか、我は西塔の武藏坊辨慶なり、粗忽の段はゆるされよ、是より主

君と頼まんと、爰に主従の約を結び、薄衣被がせ奉り、牛若丸に従ひて、九條の御所へぞ参りける。斯て平家を亡して、共にほまれの高き名は、永く月日と輝きて「蝦夷が千島の果迄も、知らぬものこそなかりけれ」

月照

花の都も秋はなほ、夕べ淋しき風情なり。名は流れたる清水や、落くる瀧の音羽山、秋の葉色の溝（とに）に散るや紅葉のちりぐと。亂れ行く世の浪花江や、蘆のさはりは繁くとも、なほ世のために身をつくし、盡さんともつくし。瀉波よる岸の波ならぬ、操もいつか深みどり、色はかはらぬ青柳の、驛路を越して香椎瀉、たらの橋を打渡り、千代の松原ちよかけて、萬代かけて君が代の、千歳の松によそへつ、神に歩みをはこ崎の、社にかけし四つ文字の、筆のあるじをよく問へば、延喜の帝かしくも、御手を染めさせ給ひつ、爰も昔は石だくみ、かさねくし白浪の、よせし昔を忘れじと、恨み浦瀉の片禰、かけて歎くも哀れなり。濡衣塚のぬれ衣、吾が身に着

たる心地せり、やがて博多の假住居、こゝも波風噪がしく、また行先は薩摩瀉、沖の小島にあらねども、（吟聲り）こゝろ細くも都にて「誰か憐れと思ふらん、便る心は筑紫瀉、一人の外に打明けて語、らふ人も浮枕」波路へだて、野間の關、野間のせきやの關守に、せきとめられて又舟に、乗とも夫とよるあだに、波にゆられて行く先は、黒の瀬戸でふ名も憂しや、やがて鹿兒島かこの鳥、翼ちめて潜みしが、また木枯しの風に驚きて、日向を指して舟出せし、日は神無月望の夜の傾く月と諸共に、照りかゝりやきて曇りなき、身は大君の爲めにとて、爰に一人の薩摩人、いかなるえにし前の世に、契も深き舟の中、底の藻屑となりぬるを、乗合人も舟人も權の雫の露ほども、さりとはしらぬ白波の、たちさはげども甲斐ぞなき。なほ東明の明鴉、鳴くよりほかはなかりけり。

威海衛

名も高き、渤海瀉の咽喉なる、威海衛の戦に「聯合艦隊司令長官、伊東中將の、手足の如く率ゐます、水雷艇の功勳を、聞も中々勇ましや」敵の艦隊由

々敷も「威海衛の要害に、防材堅く敷設して、灣内深く潜みつゝ、戦ふやうも見えざれば」我が聯合艦隊は、朝の雨雪に身を浴し、夕の風に梳り、只遠近を取巻て、空しく時日を過せしが「我陸軍は日島と、劉公島を除く外、所々の砲臺攻取たりと、信號の旗を見て、伊東司令長官は、急に水雷艇隊の司令を召し、水雷攻撃を命ずれば」藤田少佐今井大尉の兩司令、姿勢を正して申すやう、そはわれく「が望む所」されど又、備防材の切目を目ざし、暗礁多き海なれば、誓て功は奏せんものゝ、水雷艇は悉く、再びこゝに歸るまじ、さらばと計立上り、誠忠面に表はれしを、司令長官も坐ろに感じ、落す涙も國の爲、思ひ切てぞ別れける「夜も早更て月影は、威海衛の山にかくれ、黑白も分かぬ眞の暗、敵兵夢を結ぶころ、我水雷艇は第三艇隊を、先鋒に、百尺崖の此方より、波を蹴てぞ進み入る」其勢ひは矢の如く、港灣内に突入は、斥候の敵艦之を知り「信號の光りひらめくや、灣内俄かにさはきたち」打出す速射の砲丸は、雨か霰と降る中を、我艇隊はものともせず、忠

義に身をや捨小舟、縦横無盡に走せ廻る「第九號艇は、素早くも、巨艦間近かに進みより、魚形水雷を發すれば、水烟一度にとつとあげ、命中の音、天地も裂むばかりにて、艦隊なかば沈みける」其あけの夜も、此所や彼所に水雷の音物凄し「かく堅城鐵壁と頼みたる、旗艦定遠を初めとし、來遠、威遠も沈められ、戰鬥力も盡ぬれば、丁提督思ふやう、斯なる上は如何にせむ、兵士ばかりは助けんと、年は明治の廿八、二月十二日の朝風に、なびくや力なくくも、白旗樹て降伏の、使節の船ぞ見えにける」武士は、物の哀れを知るとかや、伊東司令長官は、丁提督の請を容れ、聊か心慰めむと、贈物をぞ遣はさる「丁提督は悄然として、わがとすでに終れりと、心靜かに自害して、武人の道をぞ守りける」嗚呼きのふまでもけふまでも、清國に錚々たる、北洋艦隊の司令官「丁汝昌とも仰がれし身の、かくなり果るは敵ながら、復も得がたき英雄の、末路の程こそ是非なけれ」茲に威海衛を占領し、砲聲全く鎮まれば、風雲俄かに一變し、威海の淵に渦巻し、鎮遠號を初とし、

濟遠、平遠、廣丙號、其外砲艦數十艘、檣頭高く雨を呼び、雲を起せし黃龍も、大和つるぎに角を斷ち、忽ち旗は日の丸の、輝き渡る軍艦旗、君が御稜威は天が下、仰がぬものこそなかりけれ、あふがぬ者こそなかりけれ。

五八

臺灣入

皇の、御稜威は四方に輝きて、清國遂に和議を請ひ、臺灣島を献上し、合戦茲に治まれる、君が御代こそ目出度けれ、臺灣島の土賊共、龍車に向ふ蟻螂の、斧を揮ふと聞えしかば、征討の師をぞ遣さる、近衛兵の精銳を率ゐて御渡海召れしは、陸軍中將大勲位、北白河の宮とて、金枝玉葉の御身なり、三貂角の御上陸、幕營ありし其跡に、木を削りてぞ記さる、炎熱焼くが如き日に、三貂大嶺の險阻をば、馬にも召さず越え給ひ、大雨頻りに降る時も、濡にぞ濡れて進まる、士卒之に感激し、病兵さへも立上り、命を惜まず進軍す、所々の壘に籠りたる、賊兵共の射出す彈丸は、雨か霰か白雪の、降り注が如くにて、砲烟暗く天を蔽ひ、百雷ひとしく落つるに似たり。

宮は矢石を侵しつゝ、突貫せよと下知あれば、川村少將、小島大佐を初めとし、勇み立つたる近衛兵、我先にと奮進し、賊の本營に突て入る、賊兵之に氣をのまれ、右往左往に逃げ散て、降參するもの數知れず、大砲小銃の戦利品、山を築かむ計りにて、勝鬨どつと揚ければ、宮は此時悠々として、基隆城へぞ入らせ給ふ、斯くて六月十日には、台北城を陥れ、七月新竹を占領し、あくる八月には、彰化、臺灣兩府を定め、十月初めつかた、臺南さしてぞ進まる、天熱くして瘴癘多く、地險くして糧道絶え、千辛萬苦の其中に、宮は士卒と食を分ち、晝は汗馬に鞭を揚げ、夜は荒野に露營して、戎衣の袖に月をやどし、唯國のため君の爲、平定の策をめぐらし給ふ、御痛はしやかなしやな、竹の園生の御身にて、餘りに艱苦を積せられ、遂に御病にかゝらせ給ふ、日々重らせ給ふにぞ、御供の人々打驚き、都へ歸らせ給ふやう、切に御諫め申せども、宮はいづかなきこし召さず、我官軍の將として、賊徒平定を見ぬうちは、假令臺灣の土になればとて、われのみ士卒を打すて

五九

いかにか、都に歸らむと、駕籠に召れてすいませらる。御臨終の其際に、賊徒平定ときこし召し、宮はにつこと打笑み給ひ、萬歳と唯一聲、叫び給ひし計りにて、敢なく天に登らせ給ふ。傳へ聞く日本武の故事を、今日の前に見參らせ、國中の民も兵も、慟哭せぬはなかりけり、さりながらきのふけふとは思はねど、老少不定に貴賤なし。只人は名こそをしけれみな人も、名を千歳に残せかし。

臺北悠々仁政成 皇軍到處湧歡聲
旭光將被臺南地 殲彼渠魁安萬生

と宮のうたひ給ひし如く、盛功偉烈後の世に、輝き渡るぞありがたき。北白河の水は行て歸らねど、月影ながくすみわたり、光は代々にながるらむ。

吹雪の敵

力山を抜き、氣世を蓋ふは、我北門の鎮なる。歩兵第五の聯隊なり。正字巴と降りしきる。雪を馬前の塵と見て、拂ひつ進む二百餘騎。明治三十餘り五とせの、初月末の東雲に、鉦と立ちたる霜柱、馬の蹄に蹴立つ。向ふはいづこ雪の城、田代をさしてぞ

急ぎける。後れ先立世の人は、幸か不幸か幸畑を、過てぞ來つる田茂木野を、眞白に染めて大峠、小峠風吹まくる、吹雪の音は武士の、とりし弓弦の音の如、射出す白羽の雪の矢よ、射抜かば射抜け我腕を氷の劔霜の鎗、突貫かば貫きて見よ、忠勇義烈の此腹を。如何なる艱苦も 大君の、御爲めと共に國の爲、進めくと下知すなる。劔光雪にかいりきて、威風するるとき勇將の、下には弱卒あるべきぞ。渦巻きかへす雲の足、蹴るや吹雪の音凄く、敵の礫雪の玉、左手に拂ひ右手に受けいどみ戦ふ其うちに、寒風骨や切りにけむ、凍傷破れて進む、血汐に雪も色をかへ。ひるむ模様も暫しにて、尙繰り出す雪の軍、幾重ともなく取りかこみ、黒白もわかずなりにけり。猛虎におくれぬ將卒も、終に休ふ燧山。燃む妻木もぬれ果て、雪の露營に夜を更かし、假寐の夢も結かね、明け行く空は尙白く、積れる雪に鎖されつ、接木の森も長森も、近しと聞けど乗る駒は、倒れく、て進みかね、無念遣るかたなくも、再びこゝに日は暮ぬ。起き出で見ればあなあはれ、篋深かにたち

し矢の如く、髪は千筋に凍りつゝ、眼を開き齒を嚙
で、あへなくなりし兵もあり、

國の爲雪と戦ひたふれても

勳功は高し陸奥の空

弓矢八幡神かけて、今日をかぎりの武運をも、守ら
せ給へわれは今、最後の隊伍整へて、亂れぬ列を世
に留め、魔軍のかこみ衝破り、斃れて後にやまむの
み、來れと叫ぶ隊長は、滿身總て膽ならん「かゝる
時にも我軍紀、亂れはせねどおのづから、おくれし
兵は忽ちに、崩雪の下に埋められ、進みし兵は崖に
墜ち、跡に附添ふ下士卒が、頼み切つたる隊長も、
紅蓮の氷にとちられて「呼吸さへ通はずなりければ、
親にはなれし雛鳥の、尾羽打枯れし心地せり」腸凍
りて死するとも、わが隊長は棄がたく、纏へる毛布
抜きとりて、屍にかけし下士卒の、心のうちこそ健
氣なれ「あはれ今はの際までも身は忘れてもわすれ
ざる、忠義の道の一筋に、おもふ心の深ければ、雪千
丈もなほ淺く、八甲田山も尙低し、

風是如刀雪如矢 孤軍欲破苦寒圍

銀城一夜將星墜 二百雄魂呼不歸

嗚呼陸奥の第五聯隊、雪の魔軍と戦ひて、彼れが包
圍に落ちぬれど、たてし偉勳は敷島の、日本心の花
ならん「あやに畏き 大君は、御衣の袖を絞らせて、
慰問の臣をつかはされ「大丈夫なれや國民の、猛き
鑑と愛ましぬ、たけきかゝみとめでましぬ」

召集令

都も遠き片山里に、柱傾き軒朽ちて、見るも哀れの
賤が家「母は病の床に臥し、妻は終日飢に泣く、賤
が伏家の門邊にも、召集令は下りけり」臥たる母は
涙ぐみ、いまはの枕そばたて、行けや我子よ國の
爲め、君の御爲めに候へば、今は何をかためらはん
行けや行けく我子よと、涙ながらに勵ませは、妻
は門邊に夫送り「案じ給ふな吾が夫よ、妾の息は絶
ゆるとも、母の看護は怠たらず」あかぬ別れはつき
ねども、國の爲めには是非もなし、行けや我夫國の爲
め、仇なす敵を討ちてよと、夫を勵ます言の葉の、心
の中や如何ならむ「懐ひ起せば我父も、御國の敵とた
しかひて、終に遼東の露と消え、我同胞兄弟が、肉と

血をもてとり得たる、遼東還附も彼が爲め、いかで
か討たて止む可きぞ。射貫は射貫け我が腕、死なば
護國の鬼となり、敵の亡びむそれ迄は、七度此世に
生れ来て、御國の敵とたいかはん、さらば母上吾が
妻と、勵ます言葉勵む武士。梢を拂ふ秋風に、一度
去つて歸らざる、勇士を送る易水の、昔も今も變ら
ざる、君と國との爲めなれば、身をも命も願はず。進
むに猛き大丈夫の心の内こそ勇々しけれ、心のうち
こそ勇々しけれ。

母の誠

木の葉みな、身にしむ風にさそはれて、散りて行手
の山は瘦せ。軒端あらはに見え渡る、草の庵に夜は
更て、糸繰る音の幽かなり。山の端高く月冴えて、
木戸の板橋霜白し、傾く窓の燈火は、夜な々々細く
輝きて、紡ぐ車を照すなり。頭にいたゞく白雪は、
瘦たる顔に降りかゝり、老たる身にはさゝがにの、
糸とる業の苦しみも、出て戦ふおのが子の、苦勞を
思へばいと輕し。

綱引する舟の夜寒を身にしみて

寝られぬ妻や衣うつらむ

と漁る人を思ひ遣り、ねられぬ妻が寒き夜に、衣を打
て夜を明かす、これと變れと愛情の、心は同じ母親
は、我子の困苦を忍びかね、指先凍る冬の夜も、厭
はで紡ぐ建氣さは、是も同じく國の爲、又大君の爲な
らむ。たつ霜柱踏分て、朝な々々に母親は、鎮守の
神に武運をば、我身にかへて祈りけり。赤心こめて
の祈願には、神もあはれと思召し、勳功を立てさせ
給はんは、鏡に掛けて見る如し。紡ぎし糸を布とな
し、送りし先は大丈夫が、深手淺手の別ちなく、つ
ゝむたつきとなりもせむ。恐れは多きことなれど、
皇后陛下の御心に、露ほど叶ふものならば、老の身
に取りこよもなし。足曳の山の奥なる草の家に、老
朽果し女さへ。出來得る限の業をもて、國に盡さむ
赤心を、思へば猛き御軍の、前に立べき敵なきは、
今更いふもおろかなり、今更いふもおろかなり。

旅順口

黃龍雲を呼起す、力も頼に盡てより、滿洲の野や高
麗の山。漫にあらす貪慾の、鷲の翼を束の間に、殺

し勳功の略を、いざや奏でん聞よかし」明治三十餘
 七とせの二月七日の東雲の、海に輝く朝日艦、
 三笠、初瀬に富士、八島、又敷島の曇りなき、君が御稜
 威を大空に、翻へしたる軍艦旗、高く掲し六隻は、
 東洋無雙の戦闘艦、守るも撃も自在なり」巡洋艦に
 は高砂や、千歳、笠置に吉野艦、扱又装甲巡洋艦、出
 雲、盤手に吾妻艦、八雲、淺間や常盤艦、以上合せて十
 六隻、之に従ふ驅逐艦、颯と降來る村雨に、姿もい
 つか白雲や、朝潮く、る速鳥の、外に數隻連りて、
 譽を競ふ風情なり」此精銳を率ゐたる、聯合艦隊司
 令長官、東郷中將を初めとし、申すも畏きことなが
 ら、東伏見の御宮に、山階、華頂の兩宮は、御健氣に
 も將校の、職を奮て取り給ふ」此神聖なる艦隊は、
 上は金玉の御身より」下は水兵に至るまで、君の爲
 には親にも別れ、國の爲には妻子を捨てし、忠勇義
 氣の大丈夫は「兼て期したる時來ぬと、佐世保を跡
 に遠征の、錨を抜いて渺茫たる、八重の汐路に乗り出
 ぬ」靜かなること處女に似て、逸する時は脱兎の如
 き、我艦隊は逸早く、翌る八日の夕波に、舳艫正々

堂々と、敵を目指てぞ進みける」露の艦隊は兼てし
 も「彼が根據と頼みたる、旅順の砲臺を後ろにし、
 水雷艇を前にして、鬪陣形を造りつ、守護嚴敷備
 ふるも、我は流石に過ぎし頃、渤海灣の戦に、腕に
 覚えの大丈夫が、奮て射出す巨砲の彈丸、敵も劣ら
 ず打出す、互の砲聲天地を動かし」渦巻かへす黒煙、
 旅順口外山は吼け、海は怒りて忽ちに、身の毛もよ
 だつ修羅の場」我の機先に制せられ、彼の陣形亂れ
 たる、波間を抜いて我艇隊、決死の勇士が鍛錬の、
 魚形水雷を發すれば、狙ひ違はず命中す」其音凄く
 浪を舉げ、見る々々うち、に戦闘艦、二隻の外に装甲
 の、巡洋艦を沈めたり」其翌の日に猛烈なる、總攻
 撃の鋒先に、露の艦隊は憐れにも、或は撃れ沈めら
 れ、右往左往に逃げ散りぬ」之より曇に仁川へ、我
 艦隊を分遣し、瓜生少將之を統へ、隙を窺ふ敵艦を、
 もの、美事に打破り、英佛獨艦の目の前に、猛き功
 蹟をあらはして、曇りがちな東洋に、起す御國の
 神風に、吹拂はれし雲霧の、晴れて握らん海上權」
 手に取る如き捷報を、傳へたる日は紀元節、勇みて

祝ふ旗影に、老も若きも一齊に、只萬歳と叫ぶ聲、
天地も碎けんばかりなり」

六八

欺世欺天又已欺 豺心狼骨萬邦知

縱然自恃頑兇性 焉敵堂々仁義師

地圖を案して固唾呑む、我陸軍の兵が、日毎に睨む
日本刀」西伯利亞の野やウラルの、山も日ならず
貫かむ、鷲の翼も落されむ」

常陸丸

征露の軍やう／＼進み、南山の險も打破り、旅順の
港も閉塞し」鷲の棲むてふ滿洲も、君が御稜威の旗
風に、今は靡かぬ草もなし」心の築紫の島放れ」玄
海灘の只中に、日の丸掲る常陸丸、佐渡もついひて
進み行く、船路の果は白浪の、よるべやいかに遠か
らん」何を荒ぶる荒潮の、逆巻なかの黒烟り、只一
筋に走り来て、我を取巻く敵の船」こは何事といふ
間なく、亂射亂撃雨霰進み遁れん暇もなし」千里を
走る猛獸も、水に入ては如何にせん、萬里を翔る大
鷲も、波には翼折れぬべし」心ばかりは早れども、
我は一個の運送船」進退谷まり敵艦に、任せ果しぞ

詮方なき」佐渡はいかにと眺むれば、霧に隔たりわ
かねども、同じさまなる運の末」輸送指揮官須知中
佐」是迄なりとや思ひけん、大久保少尉が捧げつる、
聯隊旗をば手にとりて」都の方を伏し拜み、火を放
ちて焼き棄つれば、各將校もとりに、覺悟のさ
まをぞ示しける」このありさまを打見つゝ、中佐は
軍刀逆手に持ち、無念の涙はらくと、落るを袖に
紛らかし、萬歳唱へにつこと笑ひ、腹搔切て失にけ
り」連なる將校を初めとし、下士兵卒に至る迄、同
じ枕に伏もあり、海に投じて死するもあり、敵彈ま
すく加はれば、甲板の上は屍の山、流る、血汐に
玄海の、波は朱にぞ變じける」君萬歳の聲ほそく、
潮の沫と消へて行く、哀れ果なき常陸丸」時は六月
十五日、夕日は波に落ちざれど霧立おほふ海の上、
あやめもわかぬばかりなり」嗚呼一聯隊の我勇士、
駒の蹄に滿洲を踏みにじらんも夢なれや、ウラル、
バイカル打越えん、あらしのごとも幻しか」水漬屍
消しかど、國に殉へし大丈夫が、清き其名は萬代も、
ひゞきの灘にたつ波の、絶ゆる時なく仰がれん、未迄

六九

遠く流るらん

別れの國歌

共に詠めし月影も、今は屍の上に照る、光も何か浮雲に、隔てられつゝ野も山も「風蕭蕭と腥き、新戰場は朧夜の、春とはいへど尙寒し」爰は戦後の奉天府「恩賜の繻帶掛まくも、綾に畏き皇國を、護る名譽の負傷兵、深手淺手の其中に、悲惨悲壯を極めしは、野戰病院の手術臺に、鮮血淋漓と迸り、骨は碎て肉破れ、見るに堪へざる重傷の、一兵卒は横たはる」夜露を拂ふ青柳の、糸より脆き玉の緒を、少時なりともつながんと、軍醫は進み懇に、應急手當施して、誠をこめていへるやう、苦痛は如何に堪へ得るや、いふべき事のあらざるかと、やさしき言葉や通じけん「苦惱に閉し眼を開き、外に云ふべき事もなし早く癒して國の爲め、再び戰場に起しめよと、答ふる聲の微かにも、精神こもりて力あり」軍醫は點頭且つ勇み、魔酔劑は徐ろに、取り出されて施され、一つ二つの數取を命ぜらるれば物憂に、三つと數へて今は早、夢幻の人となる「時來れりといふま

いに「左足を美事に切斷し、忽ち小刀執りなほし、右肩關節の切開を、試みむとする」刹那、呼吸も脉も衰へて、藥の效顯も見えざれば、軍醫は刀を抛ちて、嗚呼事已に終矣と、涙ながらに見詰れば、手術臺上花と散る、大和武雄は夢ながら、陛下の萬歲唱へつゝ、諸ふが如く語るが如く、

君が代は千代に八千代にさゞれ石の

いはほとなりて苔の生産まで

此世の別に君が代を「奏づる聲も絶え々々に、悲むが如く喜ぶか如く、或は高く又低く」苔の生産までの七文字を、終ると共に忠魂は、天の一方に翫去て、残るは名のみ計りなり「是れ此兵士は福知山、聯隊區より出身の、姓は杉山名は忠吉、國家の外に餘念なき、いと麗はしくかぐはしき、最期を茲に遂にけり」涙ある者忘るゝな、鷲の棲にし奉天も「國に殉へし英雄の、屍に替へしものなるぞ、屍にかへしものなるぞ」

橘大隊長

奥大將のもとにある、大島縦隊の、關谷聯隊は、首

山堡の激戦に、橘大隊長を失ひし、其大畧を奏てむに、聞者誰か泣ざらむ。明治三十餘り七とせの八月晦日にいと堅き、石原聯隊を先として、遼陽一の堅壘を、嚴敷襲はしめたれど、損害のみ多くして、終日苦戦を爲しければ、大島將軍は豫備隊の、關谷聯隊を殊更に、先登部隊と定めける。橘大隊長先陣に、立て進めば道すがら、風蕭々として腥く、月朦朧として水眠る、夜は丑寅となりし頃、大隊長は號令を下すや兵皆勇みたち、獅子奮迅の鯨波の聲、天地も裂んばかりなり。斷岸絶壁を攀上り、攻入る迄の間に、九折なる二た條の壕を楯とし敵兵は、銃丸劇し打出す。鬼神を挫ぐ我兵も、苦戦に苦戦を重ねては、功少して害多く、橘大隊長は牙を噛み、阿修羅王の荒るが如く、大和劍を振翳し壕の内にと躍り込み、大喝一聲叱咤して、群がる敵を左右、蜘蛛かくなは十文字、八花形といふまゝに、露は蒺藜と斬て棄つ。かゝる勇猛の振舞に、部下の將卒感激し、大隊長を討すなと、異口同音に呼はりて、壕ともいはず斬入れば、さしにも堅固の敵壘も、忽ち落ちて日の御旗、

壘上高く翻り、萬歳の聲休ざりき。敵は無念に堪へかねて、再び玆に押かへし、鯨波を作つて三方より、いと劇敷砲火をば、濺ぎ掛れば芳はしき、花橘の大隊長、左手肩先嫌ひなく、深手淺手を負ひたれど、從容自若神の如く、自ら疵に繃帶し、四方を見卸す絶頂に、動きもせず直立し、敵情具さに見てあるを、内田軍曹呼掛て、大隊長殿危険なり。遺憾ながらも此場合、一時退却なさらねば、大隊總て全滅せん。大隊長は此時に、初て身をば動かして、涙を押へ劍を撫で、部下の斯まで倒るゝを、見てはおのれは耐られず併し軍曹考へよ、けふは八月三十一日にて「恐れ多くも畏くも、東宮殿下の御誕生日ぞ、斯なん貴き日に當り、部下三分の一を死なしめて漸く取りし敵壘を、見捨て彼れに與へんは、かへすがへすも無念なり、許せ軍曹辛くとも」今上陛下の御爲と、帝國陸軍の其爲に、我と枕を並べつ、共に戦死をして吳よと、いふを聞居し軍曹は、只感涙に咽ぶのみ。此時敵彈飛來り、大隊長は深疵を、再び負へは鬼神を、欺く勇士も仰のけに、どつと音して

倒れけり、内田軍曹驚きて、大隊長殿、大隊長殿と呼はれど、空を横切る砲丸の響の外には音もなし、あたりつくづく見廻せば、大隊長のいはれし如く、友と頼みし友は皆、陛下の御爲國の爲、死して果敢なくなり居れり、詮方なしに軍曹は、大隊長を肩に掛、韋陀天走りに坂道を、轉ぶが如くに驅下りて、小松原に出し時、二人諸共敵弾に、腹と胸とを打抜かれ、再び茲に轉びける、暫くありてほのくくと、明け行く空に秋風は、身にしみ渡り虫の音は、いと哀を添ふる時、大吶喊の聲に二人とも、目を見開けば、軍曹は、おのが深手は打忘れ、眞心こめて呼びし、大隊長殿疵淺し、確乎と氣をば持たれよと、呼覺されし、大隊長、兩眼潤と見開らきて、われは此ま捨置よ、唯多くの部下を殺せしは、天皇陛下に對し奉つりても、我國人にも相濟ぬ、われの屍は朽るとも、魂茲に留まりて、若は堅く守るよと、幽かの聲に力あり、内田軍曹こらへかぬ、わつとばかりに泣伏して、暫し言葉も出ざりき、斯てあるべきにあらざれば、再び大隊長を脊に負うて、行かんす

れば力なき、足はすべりて打倒れ、又起きかへれば又倒る、心は千々にはやれども、胸の深手を如何にせん、是より曇に大隊長は、寵愛しつる從卒の、伊藤金次郎に命ずらく、此曉がたに吶喊の、聲ある後に銃聲の、絶るを聞かば勝利なり、直に馬を引來れ、われは追撃に移るべし、若し銃聲絶えざれば、われは戦死の時なるぞ、汝能々心得て、われの屍を持ち歸れと、いひ付られて從卒が、戦況如何にと窺ふに、山も崩れむ吶喊の、聲は頻りに聞ゆれど、銃聲更に絶えざれば、氣も魂も身に添はず、馳付見ればこは如何に、大隊長は軍曹の、背に負れて淋漓たる、血潮に染みてありければ、目には涙の玉霰、手走る如く飛び付きて、大隊長を己が背に、移しかへつ、泣々も、味方の陣にぞ歸りける、嗚呼嘗て東宮殿下の御側に、仕へまつりし雄將も、數ヶ所の疵に堪かねて、首山堡頭の朝露と、消えはしつれど橘の、かをりは長く遼陽の、空より高くにはふなれ、空より高くにはふなれ

257

539

明治四十一年七月二十七日印刷
明治四十一年七月三十一日發行

定價郵稅共四十五錢

編者

肥後彦

鷹

東京市小石川區小日向水道橋二丁目一番地

發行者

肥後彦 磨

東京市小石川區小日向水道橋二丁目一番地

印刷者

全勝堂 橋都儀助

東京市神田區北神保町二番地

發行所

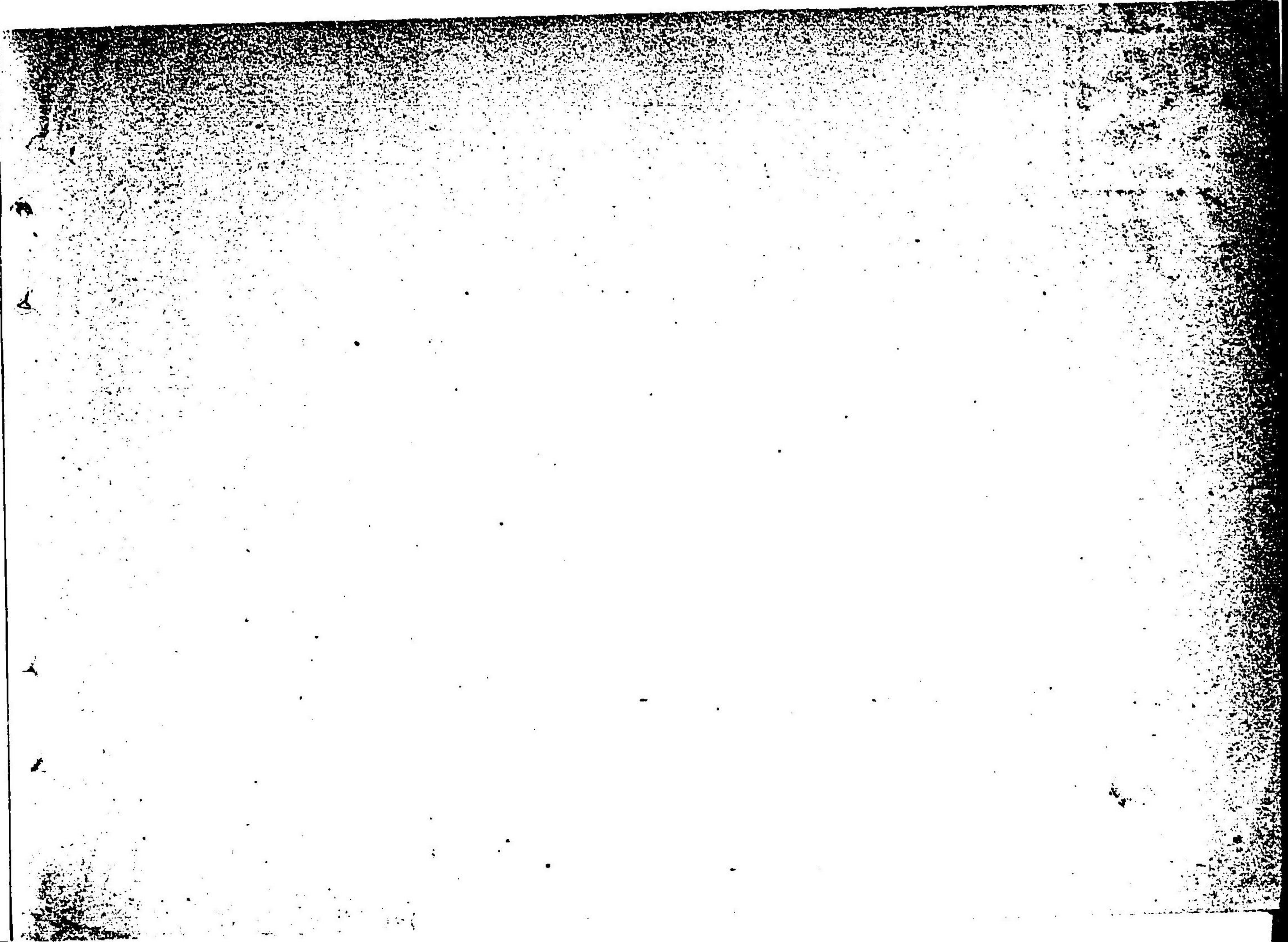
樂泉社

東京市小石川區小日向水道橋二丁目一番地

取次所

薩摩琵琶練習會

東京市神田區表神保町十番地八號



[Redacted]

特48

928

薩摩琵琶歌集

(練習用)

国立国会図書館

074635-000-8

特48-928

薩摩琵琶歌集 (練習用)

肥後 彦磨 / 編

M41

CEJ-0139

